

谷崎潤一郎の世界
鍵(カギ)

鍵
(第一部)

はじめに

さて、今回は、谷崎潤一郎の有名な『鍵』という作品であるが、この「作品」は、夫の「日記」と妻の「日記」のそれだけから構成されている作品であるとともに、夫の「日記」というのは、「漢字+カタカナ」の表記であり、一方、妻の「日記」というのは、「漢字+ひらがな」の表記になっています。——そして、夫の日記の「本文」というのは、まさに「漢字+カタカナ」の表記であり、それは、ちらっと見ただけではすぐには内容の分からない、どこか日記にふさわしい何か秘密めいた感じを醸し出している文体ではあるが、しかし、それを読む読者にとっては実に「読みづらい」文体であり、それゆえ、その「本文」を正確に読んでいる人も少ないのではないかと思う。そこで、今回は「本文」をすべて「漢字+ひらがな」の表記に置き換えて書き記しているとともに、分量も非常に増えていますので、今回は「五部作」として、その「第一部」から発表していきたいと思っておりますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十年六月吉日（改訂版）

如月翔悟

目次

谷崎潤一郎の「鍵」

はじめに

序 「鍵」の表記

一、第一部（四人の思惑）

二、第二部（敏子の別居）

三、第三部（木村との性交渉後）

四、第四部（夫が倒れる）

五、最終部（夫の死後）

※ 参考文献

例えば、谷崎潤一郎の有名な『鍵』^{かぎ}という作品は、夫の「日記」と妻の「日記」だけから構成されている作品であるとともに、夫の「日記」は、「漢字+カタカナ」という表記でなされ、一方、妻の「日記」は、「漢字+ひらがな」の表記になっている。それは、一体、なぜなのかと問えば、まず、「漢字+カタカナ」の表記というのは、どちらかと言えば、まさに「男性の表記」であるとともに、昔の「公文書」というのは、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」の表記でなされていたのである。一方、「ひらがな」による表記というものは、どちらかと言えば、まさに「女性の表記」であり、平安時代、「ひらがな」は、「女文字」（おんな手^で）と呼ばれ、女性たちの「日記」は、すべて「ひらがみ」で表記されていたのである。一方、「漢字」というのは、まさに「男文字」（おとこ手^で）と呼ばれ、男の「日記」は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されていたのである。

例えば、有名な紀貫之の『土佐日記』の冒頭では、「……男もすなる日記といふもの女もしてみむとてするなり」となっている。これは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、紀貫之という人は、当然のことながら、男性であるので、日記は、ふつうであれば、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されるものである。ところが、紀貫之という人は、「漢字」を使つての表記ではなく、むしろ「ひらがな」を使つての表記で書いてみたくなったのであり、それは、われわれ日本人の微妙な様々な「感情表現」などは、「漢文」や「漢字+カタカナ」の表記では、なかなか思う存分に表現でき得ないからであり、そして、われわれ日本人の微妙かつ繊細な「感情表現」などを思う存分に表現し得た作品の一つが、まさに紫式部の『源氏物語』であると言つてもよいのだろう。それには、次のような「歴史の推移」があるのである。

まず、われわれ日本においては、長く「文字」のない「口承時代」^{こうじょう}がつづき、やがて、中国大陸や朝鮮半島の「文化」とともに、いわゆる「文字（漢字）」が入つて来たわけである。そして、その中国や朝鮮半島の「文字（漢字）」を使つて、いわゆる話し言葉である「大和言葉」を、「漢字」で表記するようになるのである。また、奈良時代には、中国の「漢文」や「漢詩」などを真似て、盛んに「漢文」や「漢詩」などを作つてみたり、また、例えば、『古事記』や『日本書紀』なども、すべて「漢文」（漢字だけ）で表記され、また、有名な『万葉集』なども、いわゆる「漢字一字が一つの音」を表す、まさに「万葉がな」で表記されていて、それゆえ、見た目は、すべて「漢字」だらけで表記されていたのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、未だわが国には「ひらがな」というものが存在していなかったからである。

* * *

それでは、「ひらがな」や「カタカナ」は、一体、いつどのようにして誕生してきたのかと問えば、それは、次のような推移からである。——まず、「カタカナ」であるが、この「カタカナ」の「起源」というのは、九世紀初めの奈良の「古宗派」の学僧たちの間で漢文を「和読する」ために生じて来たものであるが、「カタカナ」というのは、まさに「生まれるべくして生まれて来た」ものであり、というのも、当時の知識人（教養人）たちと言えば、それは、まさに「僧侶たち」であるが、その「僧侶」たちやその他の教養人たちは、「漢文」というものをそのまま、「中国語読み」（音読み）していたというよりは、む

しる「漢文」というものをまさに「日本語読み」（漢文訓読）をしていたのである。

その場合、「漢字」だらけの「漢文」（それを「白文」と呼ぶ）に、例えば、「レ点」や「一二三点」或いは「上中下点」などの、いわゆる「返り点」を漢字の「左下」に小さく付けたり、また、「ハ、ヲ、ニ、ト、その他」などの「カタカナ」を漢字の「右下」に小さく添えて、「漢字」だらけの「漢文」（つまり「白文」）を、より読み易くしていたのである。そして、そのような「漢文」を、いわゆる「日本語読み」の「文章」に書き下す場合には、いわゆる「漢字仮名交り文」という形式で表記することになるが、その場合、一つには、「漢字+カタカナ」という形で表記する場合と、もう一つは、「漢字+ひらがな」という形で表記する、いわゆる「書き下し文」とがあるということである。

そして、「公文書」は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記され、一方、文学や一般には「漢字+ひらがな」で表記されるようになるのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、結局、「漢文」の方が「優れたもの」と考えられていたとともに、一方、「漢字+ひらがな」というのは、われわれ日本人の「話し言葉」である「大和言葉」に「より近い表記」であり、それゆえ、「公文書」（正式の文章）は、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記され、そして、文学や一般には「漢字+ひらがな」で表記されるようになるのである。——それでは、その「カタカナ」の具体的な「生み出し方」は、一体、どのようなものであったのかと問えば、それは、例えば、「阿」から「ア」を生み出し、「伊」から「イ」を生み出し、「宇」から「ウ」を生み出し、「江」から「エ」を生み出し、そして、「於」から「オ」を生み出す、というように、主に「編や旁或いは冠」などから「生み出された」ものであるが、「カタカナ」というのは、本来、「漢文」を「和読する」ために生じて来た「文字」であるとともに、「漢文」を「日本語読み」の「漢字仮名交り文」にする時に使用された「文字」でもあり、その「方法」は、漢字の「右下」に小さく書き添えた「カタカナ」をより大きな「カタカナ」にして「表記」したということである。

* * *

一方、「ひらがな」というのは、平安時代の初期に生み出されるが、それは、まず、「漢字一字が一つの音」を表す、いわゆる「万葉がな」（その「漢字」をほとんど簡略化したものであるが、その「ひらがな」の具体的な「生み出し方」としては、例えば、「ア」から「あ」を生み出し、「似」から「い」を生み出し、「宇」から「う」を生み出し、「衣」から「え」を生み出し、そして、「於」から「お」を生み出すというように、まさに「文字の簡略化」から生み出されたものである。それでは、一体、誰が何のためにそのようなものを生み出したのかと問えば、それは、まず、その当時の僧侶や役人たち或いはその他の教養人たち（男性）は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」という表記を使用していたが、一方、和歌を詠む歌人や物語やその他などを書く人たち（男性も女性）も、むしろ「漢字+ひらがな」という表記を使用するようになるが、それは、われわれ日本人の「話し言葉」である「大和言葉」に「より近い表記」であるからである。

つまり、なぜ、「ひらがな」が生み出されたかと問えば、一つは、いちいち漢字を書くのが面倒なので、その「簡略化」のためであり、それは、まさに「楷書↓行書↓草書↓極端な草体化（平仮名）」であり、一つは、われわれ日本人の微妙な様々な「感情表現」などは、「漢文」や「漢字+カタカナ」の表記では、なかなか思う存分に表現でき得ないからであり、そして、もう一つは、「漢字」だらけの表記では、まさに「漢語」（中国語）

であって、それは「漢民族」（中国人）の言語表記に過ぎない。わが国にはわが国の「話し言葉」である「大和言葉」に見合った「書き言葉」（文字）があつて然るべきであり、それは、まさにわれわれ日本人としての「アイデンティティ」の問題でもあり、八九四年の「遣唐使廃止」以降、やがて、日本独自の「国風文化」が栄えるようになるとともに、公文書は、戦前まで、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されたが、一方、文学や一般では、まさに「漢字+ひらがな」という「文体」で、話し言葉である「大和言葉」が表記されるようになるとともに、中国の「漢詩」に対抗した、日本独自の「和歌」が確立することにもなるのである。それこれは、まさに延喜五年（九〇五年）に完成した、余りにも有名な『古今和歌集』であり、その形式が、いわゆる「五・七・五・七・七」という形式になったのも、それこそは、まさにわれわれ日本人の「話し言葉」（大和言葉）の特性に最も叶った「形式」でもあつたからであろう。

平成三十年六月吉日（改訂版）

如月翔悟

谷崎潤一郎の世界
鍵(第一部)

鍵
(第一部)

まえがき

さて、今回は、谷崎潤一郎の有名な『鍵』の「第一部」になるが、その内容は、次のようなものである。まず、夫（大学教授）は、その「日記」の冒頭で、「……僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来たが、今年からはそれを恐れぬことにした」とあり、一方、妻（郁子）も、その「夫」に対抗して、今年から「日記」を付けるようになるのである。——また、この作品の主要な「登場人物」は、「四人」であり、一人は、主人公の夫（大学教授）であり、一人は、その妻（郁子）であり、また、一人は、娘（敏子）であり、そして、もう一人は、娘の結婚相手とみなされる「木村」という人物になるわけである。……

そして、木村という人は、よく「三人」（母親と娘と木村）とで「映画」を一緒に観に出かけたり、また、夕食の時に、娘（敏子）を除いた「三人」（夫と妻と木村）とで酒（ブランデー）を飲むようになるが、ある日、妻（郁子）は、酒（ブランデー）に酔い過ぎて、風呂場で倒れるという「事件」を起こすことになり、その倒れた妻（郁子）を木村と二人で「寝室」へと運んだ後、夫（大学教授）は、その半睡半醒状態の妻の「全裸体」を詳細に調べたあと、その興奮した状態で妻と「事」を行なうようなことを、その後も同じパターンで幾度も繰り返し、また、ポラロイドを使って妻の「全裸写真」を撮るといふ展開にもなる内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十年六月吉日（改訂版）

如月翔悟

目次

谷崎潤一郎の「鍵」

はじめに

序 「鍵」の表記

一、第一部（四人の思惑）

- 一、夫の日記 一月一日（日記に性生活を記す事と妻の性格や生立ち）
- 二、妻の日記 一月四日（夫から見た妻と妻の「想い」との食い違い）
- 三、夫の日記 一月七日（木村年始に来、昼映画、夜三人で酒を飲む）
- 四、妻の日記 一月八日（妻は夫を半分は嫌い、半分は愛している）
- 五、夫の日記 一月十三日（木村を刺激剤と利用することを思いつく）
- 六、夫の日記 一月十七日（夫婦は毎晩酒を飲み、量が殖えていく）
- 七、妻の日記 一月二十日（妻のブランデーの量が極量まで来ている）
- 八、夫の日記 一月二十八日（妻風呂場で倒れ木村とで寝室へと運ぶ）
- 九、妻の日記 一月二十九日（今日は終日頭が重く起き上る気力なし）
- 十、夫の日記 一月二十九日（蛍光灯の下妻の全裸体を見た後、性交）
- 十一、妻の日記 一月三十日（妻は今まで経験した事のない快感を得る）
- 十二、夫の日記 一月三十日（夜三人で酒を飲みまた風呂場で倒れ性交）
- 十三、妻の日記 二月九日（敏子は静かに勉強したいと別居を申し出る）
- 十四、夫の日記 二月十四日（木村は今日私にポラロイドの話をする）
- 十五、妻の日記 二月十六日（日記を付けていることを感づかれる？）
- 十六、夫の日記 二月十八日（妻の木村さんの謔言の意味と娘の別居）
- 十七、妻の日記 二月十九日（娘の心理状態掴めない。日記にテープを）

二、第二部（敏子の別居）

三、第三部（木村との性交渉後）

四、第四部（夫が倒れる）

五、最終部（夫の死後）

※ 参考文献

第一部

(四人の思惑)

一、夫の日記 一月一日(土)

さて、夫の日記の「本文」というのは、まさに「漢字十カタカナ」の表記であり、それは、ちらっと見ただけではすぐには内容の分からない、どこか日記にふさわしい何か秘密めいた感じを醸し出している文体ではあるが、しかし、それを読む読者にとつては実に「読みづらい」文体であり、それゆえ、今回は「漢字十ひながな」の表記に置き換えて書き記してみると、一月一日の、その「冒頭」部分は、次のようになるかと思う。……

*

*

まず、この作品に登場する主要な登場人物は「四人」であり、一人は、主人公の「夫」(大学教授、五十六歳)、一人は、その「妻」(郁子、四十五歳)、一人は、二人の間の実の「娘」(敏子、二十五歳)、そして、もう一人は、娘の結婚相手とみなされる「木村」(若い教師)ということになっている。そして、その「冒頭」は、「……一月一日。僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテイタヨウナ事柄ヲモアエテ書き留メルコトニシタ。僕ハ自分ノ性生活ニ関スルコト、自分ト妻トノ関係ニツイテハ、アマリ詳細ナコトハ書カナイヨウニシテ来タ。ソレハ妻ガコノ日記帳ヲ秘カニ読ンデ腹ヲ立テハシナイカトイウコトヲ恐レテイタカラデアツタガ、今年カラハソレヲ恐レヌコトニシタ。妻ハコノ日記帳ガ書齋ノドコノ抽出ニハイツテイルカヲ知ツテイルニ違イナイ。……」(以下省略)

一、本文 その一

一月一日。……僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関する事、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたからであったが、今年からはそれを恐れぬことにした。妻はこの日記帳が書齋の何処の抽出に這入っているかを知っているに違いない。古風な京都の旧家に生れ封建的な空気の中に育った彼女は、今日もなお時代遅れな旧道徳を重んずる一面があり、或る場合にはそれを誇りとする傾向もあるので、まさか夫の日記帳を盗み読むようなことはしそもないが、しかし、今後、夫婦生活に関する記載が頻繁に現われるようになれば、果して彼女は夫の秘密を探ろうとする誘惑に打ち勝ち得るであろうか。彼女は生れつき陰性で、秘密を好む癖があるのだ。彼女は知っていることでも知らない風を装い、心にあることを容易に口に出さないのが常であるが、悪いことにはそれを女の嗜みであるとも思っている。僕は、日記帳を入れてある抽出の鍵はいつも某所に隠し、時々、その隠し場所を変えているが、詮索好きの彼女は事に依ると過去のあらゆる隠し場所を知っているかも知れない。それでは、なぜ抽出に鍵を懸けたり又その鍵を彼方此方へ隠したりしたのか。それは或は彼女の搜索癖を満足させるためであったかも知れない。……郁子よ、わが愛する愛しの妻よ、僕はお前がこの日記を盗み読みしつつかあるかどうかを知らない。僕がお前にそんなことを聞いても、お前は「人の書いたものを盗み読みなど致しません」と答えるにきまっているから、聞いたところで仕方がない。だがもし読んでいるのであれば、決してこれは偽りの日記でないことを、この記載はすべて真実であることを信じてほしい。いや、疑い深い人に向ってこう云うことを云うと却って疑

いを深くさせる結果になるから、もう云うまい。それよりこの日記を読んでさえくれればその内容に虚偽があるか否かは自然明かになるであろう。(本文)

*

*

では、ここまでの「本文」の内容について考えてみたいと思うが、まず、冒頭、「一日。……僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関する事、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたからであつたが、今年からはそれを恐れぬことにした」とある。——つまり、今までは、自分の性生活に関する事、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来たが、それは、そのようなこと(つまり「自分の性生活に関する事、自分と妻との関係について」)を露骨に書けば、きつと「妻に嫌われる」だろうと恐れていたからである。というのも、妻は、古風な京都の旧家に生れ封建的な空気のうちに育つた女性で、今日もなお時代遅れな旧道徳を重んずる一面があり、或る場合にはそれを誇りとするような傾向があるからである。もちろん、それは、その通り事実であり、間違ひではないが、しかし、それが「彼女のすべて」ではないのであり、それは、あくまでも外から見た、つまり、夫から見た「妻の特徴」(つまり「外的事実」)であつて、一方、真の「妻の姿」(つまり「内的事実」)というものは、むしろ「妻の日記」の中にこそ、はつきりと書き記されているのである。……

また、主人公の「夫」という人は、日記帳を入れてある抽出の鍵はいつも某所に隠し、時々、その隠し場所を変えているが、それは、妻に日記を読まれることを恐れているからではなく、むしろ「妻に日記を読ませるための仕掛け」であり、それでは、なぜ抽出に鍵を懸けたり又その鍵を彼方此方へ隠したりすることが、どうして「妻に日記を読ませるための仕掛け」になるのかと問えば、それは、彼女の「搜索癖」や「詮索好き」などを満足させるためであつたかも知れないとある。つまり、「……夫が隠そう隠そうとすればするほど、妻はそれを知ろう知りたいと思うタイプの女性だ」と見ているのである。——それに加えて、「……彼女は生れつき陰性で、秘密を好む癖があり、彼女は知つていながらも知らない風を装い、心にあることを容易に口に出さないのが常であるが、悪いことにはそれを女の嗜みであるとも思つていような女性である」とも見ているのである。そして、表向きは、貞女であり、猥談めいた話は避け、また、人の書いたものを盗み読みなど致しません、などと最もらしいことを云つていても、本質は、淫慾であり、それゆえ、今後、夫婦生活に関する記載が頻繁に現われるようになれば、果して彼女は夫の秘密を探ろうとする誘惑に打ち勝ち得るであろうか。つまり、必ず、その「内容」に興味を示すようになるに違いないと、夫は見越しているのである。

そして、主人公の「夫」という人が、今年からこのような「日記」を書くようになった「最大の理由」、また、妻に対する「最大の不満」は、次のようなことである。

二、本文、その二

もともと僕がこう云うことを書く気になつたのは、彼女のあまりな秘密主義、——夫婦の間で閨房のことを語り合うさへ恥ずべきこととして聞きたがらず、たまたま僕が猥談め

いた話をしかけると忽ち耳を蔽うてしまふ彼女の所謂「身嗜み」、あの偽善的な「女らしさ」、あの態とらしいお上品趣味が原因なのだ。連れ添うて二十年にもなり、嫁入り前の娘さえある身でありながら。寢床に這入っても未だにただ黙々と事を行うだけで、ついぞしんみりとした睦言を取り交そうとしないのは、それでも夫婦と云えるであろうか。僕は彼女と直接閨房のことを語り合う機会を与えられない不満に堪えかねてこれを書く気になったのだ。今後は僕は、彼女がこれを実際に盗み読みしていると否とに拘わらず、しているものと考えて、間接に彼女に話しかける気持でこの日記をつける。

ただ、僕は生理的に彼女のようにあの方の欲望が旺盛でなく、その点で彼女と太刀打ち出来ない。僕は今年五十六歳（彼女は四十五になった筈だ）だからまだそんなに衰える年ではないのだが、どう云う訳か僕はあのことには疲れ易くなっている。正直に云って、現在の僕は週に一回くらい、——むしろ十日に一回くらいが適當なのだ。ところが彼女は、あの方は病的に強い。さしあたり僕が甚だ当惑し、参っているのは、この一事なのだ。僕は夫として、彼女に十分の義務を果たし得ないのは申訳がないけれども、そうかと云って、彼女がその不足を補うために、もし仮りに、他の男を拵えたとすると、僕はそれには堪えられない。僕はそんな仮定を想像しただけでも嫉妬を感じる。……僕が困っているのは、僕の体力が年々衰えを増しつつあることだ。近頃の僕は性交の後で実に非常な疲労を覚える。その日一日ぐったりとして物を考える気力もないくらいに。……僕は彼女との性交を嫌っているのではない。僕は義務の觀念からいやいや彼女の要求に応じているのは断じてない。僕は彼女を熱愛しているのだ……。 (本文)

*

*

さて、「……もともと僕がこう云うことを書く気になったのは、彼女のあまりな秘密主義、——夫婦の間で閨房のことを語り合うさえ恥ずべきこととして聞きたがらず、たまたま僕が猥談めいた話をしかけると忽ち耳を蔽うてしまふ彼女の所謂「身嗜み」、あの偽善的な『女らしさ』、あの態とらしい『お上品趣味』が原因なのだ。連れ添うて二十年にもなり、嫁入り前の娘さえある身でありながら。寢床に這入っても未だにただ黙々と事を行うだけで、ついぞしんみりとした睦言を取り交そうとしないのは、それでも夫婦と云えるであろうか。僕は彼女と直接閨房のことを語り合う機会を与えられない不満に堪えかねてこれを書く気になったのだ」とある。これこそが、まさに「妻に対する最大の不満」であるが、それでは、なぜそうなのかと問えば、それは、次の一月四日の「妻の日記」の中にはっきりと記されているのであり、その「内容」は、次のようなものである。

つまり、「……この頃になつて私がつくづく感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、と云うことである。私にはもつと適した相手があつたであろうし、彼にもそうであつたろうと思う。私と彼とは、性的嗜好が反発し合っている点、余りにも多い。私は父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこう云うものと思つて過して来たけれども、今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思うから仕方なく忪えているものの、私は時々彼に面と向つてみて、何と云う理由もなしに胸がムカムカして来ることがある。そう、そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚の第一夜、彼と褥を共にしたあの晩からそうであつた。あの遠い昔の新婚旅行の晩、私は寢床に這入つて、彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、途端にゾウツと身慄いがしたことを、今も明瞭に思い

出す。始終眼鏡をかけている人が外すと、誰でもちよつと妙な顔になるものだが、夫の顔は急に白つちやけた、死人の顔のように見えた。夫はその顔を近々と傍に寄せて、穴の開くほど私の顔を覗き込んだものだった。私も自然彼の顔をマジマジと見据える結果になったが、その肌理の細かい、アルミニウムのようにツルツルした皮膚を見ると、私はもう一度ゾウツとした。だから私は彼の顔を見ないようにしようと思ひ、枕もとの電灯を消そうとするのだが、夫は反対に、あの時に限って部屋を明るくしようとするのだ」とある。そして、これこそは、まさに「夫が全く知らない妻の本心」そのものなのである。

例えば、夫は、「……（彼女は）、寢床に這入つても未だにただ黙々と事を行うだけで、ついぞしんみりとした睦言を取り交そうとしないのは、それでも夫婦と云えるであろうか」と不満を述べているが、その「理由」は、次のようなことである。――まず、夫の「要求」に対して、妻が「それに応える」。それは、いわば「妻の勤めの一つ」であるのかも知れないが、その場合、彼女自身は、セックス自体は、嫌いではないのである。それゆえ、セックスには応じているのである。セックスには応じてはいるが、しかし、夫の顔は、見たくはないのである。もちろん、それは、顔だけではなく、全体的にそうなのである。だからこそ、彼女は、「……黙々と事を行うだけで、ついぞしんみりとした睦言を取り交そう」という気持ちにはなれないのである。――つまり、「性欲」は満たしたいが、「心から愛を語り合いたい相手」ではないのである。……例えば、若しも夫との「性交」を断つてしまえば、それは、まさに「セックスストレス」になるが、そこまでは望んではないのである。一方、これは、後日になるが、「木村」という娘の結婚相手とみなされる人物とは、やがて「愛を語り合う関係」になつていくのである。この辺の微妙な「心の推移」は、彼女は、その最後の方の「妻の日記」のその中で、次のように記しているのである。……

まず、夫が妻を熱愛していることは疑いようもないが、一方、「……同時に私も当初において、彼を熱愛していたことを認めてもらいたい」のである。――「遠い昔の新婚旅行の晩、……彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、とたんにゾウツと身慄いがした」とも事実であり、「今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい」ことも、時々彼に面と向つてみて、「何という理由もなしに胸がムカムカ」したことも事実であるに相違ないが、そうだからといって、私が彼を愛していなかったということにはならない。「古風な京都の旧家に生れ封建的な空気の中に育つた」私は、「父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこういうものと思わされてきた」のであるから、好むと好まないとにかかわらず、彼を愛するよりほかに術はなかったのである。（それは、「心の底から彼を愛していた」ということではない）。まして私には「今日もなお時代おくれな旧道徳を重んずる一面があり、或る場合にはそれを誇りとする傾向もあつた」のである。私は胸がムカムカするたびに、夫に対して、亡くなった私の父母に対しても、そういう心持を抱く自分自身を浅ましいとも、申しわけがないとも感じ、そんな心持が起れば起るほど、なおさらそれに反抗して彼を愛するように努めたし、また愛し得ていた。なぜかというのに、生れつき体質的に淫蕩であつた私は、どうでも、どうでも、そうするよりほかに生き方はなかつたからである。当時の私が、夫に対して何かの不満を持つていたとすれば、それは夫が私の旺盛な慾求に十分な満足を与えてくれないという点にあつたが、それでも私は、彼の体力の乏しさを咎めるよりは、自分の過度な淫慾を恥じる気持の方が強かつた。私は彼の精力の減退を歎きながらも、そのために愛憎を尽かすどころか、一層愛

情を募らせつつあった。しかるに、彼は何と考えたのか、この正月からそういう私に新しい眼を見開かせてくれたのである。それは、夫がわざと「木村」という娘の結婚相手とみなされる人物を彼女に接近させるようなことをしたのであり、その結果、彼女の「心の中」にも大きな変化が生じるようになるが、それは、後述として、ともかく、これが結婚二十数年間の今日までの彼女のいわば「心の推移」になるのである。

それでは、いっそ誰かと「浮気や不倫」などを行なえば、それでよいではないかと云うかも知れないが、彼女自身、この段階では、まだそこまでの「積極さ」はないのである。むろん、やがて、娘の結婚相手とみなされる「木村」という顔がジェームズ・スチュアートによく似た「若くて遅いハンサムな男性」と結局は「不倫関係」になっていくが、今の段階ではまだそういう気持ちにはなれないのである。それらは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、妻は、夫を好きになろうと務めてきた。その結果、一面では好きになれても、もう一面ではどうしても好きになれない部分が残ってしまう。つまり、手放しで無条件で「全面的に好きにはなれない」のである。それは、相手を「好きになろうと努力すること」と「心の底から相手が好きである」こととは、全く全然違うことであり、もし「心の底から相手が好きである」ならば、例えば、「……身も心も相手に捧げてもよいと思えるかも知れないが、一方、そうではない場合には、なかなかそういう気持ちにはなれないもの」である。そして、結局、夫には「そういう気持ちにはなれなかった」のである。一方、「木村」という「若くて遅いハンサムな男性」には、結果として、「そういう気持ちになれた」ということである。むろん、それは、彼女が望むような「男性だった」からであり、それゆえ、ただ単に「若くて遅いハンサムな男性」だからということだけでは決してないのである。

*

*

一方、夫はと云えば、「……僕は生理的に彼女のようにあの方の欲望が旺盛でなく、その点で彼女と太刀打ち出来ない。僕は今年五十六歳、彼女は四十五になった筈だ。だから、まだそんなに衰える年ではないのだが、どう云う訳か僕はあのことには疲れ易くなっている。正直に云って、現在の僕は週に一回くらい——むしろ十日に一回くらいが適当なのだ。ところが彼女は、あの方は病的に強い。さしあたり僕が甚だ当惑し、参っているのは、この一事なのだ。僕は夫として、彼女に十分の義務を果たし得ないのは申訳がないけれども、そうかと云って、彼女がその不足を補うために、もし仮りに、他の男を拵えたとすると、僕はそれには堪えられない」とある。——まず、「……僕は生理的に彼女のようにあの方の欲望が旺盛でなく、その点で彼女と太刀打ち出来ない」と記してはいるが、しかし、実際は、非常に強い「慾望」を持っているのである。ところが、肉体の方が衰え始めていて、「……現在の僕は週に一回くらい——むしろ十日に一回くらいが適当なのだ」と云っている。むろん、この「言葉通り」であるかどうかはよく分からないが、とにかく、あのことには疲れ易くなっているのは事実なのである。一方、「……彼女は、あの方は病的に強く、さしあたり僕が甚だ当惑し、参っているのは、この『一事』なのだ。僕は夫として、彼女に十分の義務を果たし得ないのは申訳がないが、そうかと云って、彼女がその不足を補うために、もし仮りに、他の男を拵えたとすると、僕はそれには堪えられない」とある。それゆえ、何とかそれを回復させたいと思っているが、その「方法」として、一つは、月に一回の男性ホルモンを用いたり、一つは、それだけではまだ不足な気がし、

脳下垂体前葉ホルモンを注射したりしている。そして、もう一つは、「新たなことを思いつくことになるが」（それは「木村と云う刺激剤を利用すること」）だったのである。

三、本文、その三

ところで、彼女には彼女自身全く気が付いていないところの或る独得な長所がある。若い頃、女遊びをしたことのある僕は、彼女が多くの女性の中でも極めて希にしかない器具の所有者であることを知っている。彼女がもし昔の島原のような妓楼に売られていたら、必ずや世間の評判になり、天下の男子は悉く彼女に悩殺されたかも知れない。こんなことを彼女に知らせない方がよいのかも知れないが、しかし彼女はこれを聞いて、多分表面は怒って見せながら、内心は得意に感じることが禁じ得ないのではなからうか。僕は彼女のあの長所を考えただけでも嫉妬を感じる。もしも僕以外の男性が彼女のあの長所を知ったならば、そして僕がそれに十分に報いていないことを知ったならば、どんなことが起るであろうか。僕はそれを考えると不安でもあり、彼女に罪深いことをしているとも思い、自責の念に堪えられなくなる。そこで僕はいろいろな方法で自分を刺激しようとする。例えば、僕の性慾点——僕は眼をつぶって眼瞼の上を接吻して貰う時に快感を覚える、一方、彼女の性慾点——彼女は脇の下を接吻して貰うことを好むのである、——ところが、彼女はそう云う「不自然な遊戯」に耽ることを欲せず、飽くまでもオーソドックスな正攻法を要求する。彼女はここでも「女らしい身嗜み」を固守してそれに反する行為を嫌う。彼女は又僕が足のフエチであることを知っていないながら、かつ美しい足の所有者であることを知っていないながら、いや知っているが故に、めったにその足を僕に見せようとしない。せめてその足の甲に接吻させてくれと云っても、まあ汚いとか、こんな所に触るものではない。それと云って、なかなか願いを聴いてくれない。それやこれやで僕は一層手の施しようがなくなる。……明日の晩は「ヒメハジメ」である。オーソドックスを好む彼女は毎年の吉例に従い、必ずその行事を厳粛に行わなければ承知しないであろう。（本文）

*

*

さて、今度は、「……彼女には彼女自身全く気が付いていないところの或る独得な長所がある。若い頃、女遊びをしたことのある僕は、彼女が多くの女性の中でも極めて希にしかない器具の所有者であることを知っている。彼女がもし昔の島原のような妓楼に売られていたら、必ずや世間の評判になり、天下の男子は悉く彼女に悩殺されたかも知れない」というものである。——これは、俗に「名器」と呼ばれるものであるが、もし男性にとつてこの上もなく気持ちのいい「名器」というものがあるとすれば、当然のことながら、女性にとつてもこの上もなく気持ちのいい「名刀」（或いは「一振り」）というものがあつても不思議はないのである。それはともかく、「……彼女はこれを聞いて、多分表面は怒って見せながら、内心は得意に感じることが禁じ得ないのではなからうか」と云っている。これは非常に興味深い「言葉」であり、例えば、「……きれいだね、かわいいね、ハンサムだね、カッコいいね、年より若く見えるね、すごいね、上手いね、その他（財産、所得、所有物、職種、能力、社会的地位、名誉、名声、その他）」、どういうことであれ、他人からほめられることによつて、そんなことはない、表面的には否定しながらも、内心は、まさに「得意を感じている」という心理である。これは、一体、何なのかと問えば、それ

は、われわれ人間のいわゆる「他人に認められたい」という「承認欲求」が、（たとえそれがお世辞であつても）、一応「充たされた」ことになるからである。そして、「……僕は彼女のあの長所を考えただけでも嫉妬を感じる。もしも僕以外の男性が彼女のあの長所を知ったならば、そして僕がそれに十分に報いていないことを知ったならば、どんなことが起るであろうか。僕はそれを考えると不安でもあり、彼女に罪深いことをしているとも思ひ、自責の念に堪えられなくなる」とある。これは、一つは、まさに「独占欲」であり、自分一人だけで彼女を「独占しておきたい」ということである。しかし、「……独占しておきながら、彼女に十分な満足を与えられていないこと」は、「……彼女に罪深いことをしているとも思ひ、自責の念に堪えられなくなる」のである。だからこそ、まさに「……何とかそれを回復させて、彼女を満足させてやりたい」ということなのである。

そのために、いろいろな手を「試みる」のであるが、例えば、「……僕の性慾点——僕は眼をつぶつて眼瞼の上を接吻して貰う時に快感を覚える、一方、彼女の性慾点——彼女は脇の下を接吻して貰うことを好むのである、——ところが、彼女はそう云う『不自然な遊戯』に耽ることを欲せず、飽くまでもオースドックスな正攻法を要求する。彼女はここでも『女らしい身嗜み』を固守してそれに反する行為を嫌う。彼女は又僕が足のフェチであることを知っていないながら、めつたにその足を僕に見せようとしなない。せめてその足の甲に接吻させてくれと云つても、まあ汚いとか、こんな所に触るものではないと云つてもオースドックスな正攻法」を要求し、それ以外のいろいろな「試み」を嫌っている。（これは、夫を心の底から愛してはいないからであり、身も心もすべてを夫に捧げる気にはなれないからである）。一方、夫の方は、だからこそ、僕は一層手の施しようがなくなるといふことである。そして、明日は「ヒメハジメ」と「前振り」をして、その結果は、「妻の日記」に記されることになるのである。

二、妻の日記 一月四日（火）

さて、次は妻の「日記」であるが、それは、ふつうの「漢字十ひながな」の表記であり、それゆえ、非常に読み易いとともに、一月四日の「本文」は、次のようなものである。

一、本文、その一

一月四日。今日私は珍しい事件に出遇つた。三日の間書斎の掃除をしなかつたので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入つたら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、ただ不用意にあの鍵をあんな風に落しておいたとは考えられない。夫は実に用心深い人なのだから。そして長年の間毎日日記をつけていながら、嘗て一度もあの鍵を落したことなくなかつたのだから。……私は勿論夫が日記をつけていることも、その日記帳をあの小机の抽出に入れて鍵をかけていることも、そしてその鍵を時としては書棚のいろいろな書物の間に、時としては床の絨毯の下に隠していることも、とうの昔から知っている。しかし私は知つてよいことと知つてはならないこととの区

別は知っている。私が知っているのはあの日記帳の所在と、鍵の隠し場所だけである。決して私は日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない。だのに心外なことには、生来疑い深い夫はわざわざあれに鍵をかけたなりその鍵を隠したりしなければ、安心がならなかったのであるらしい。……その夫が今日その鍵をあんな所に落して行ったのはなぜであろうか。何か心境の変化が起つて、私に日記を読ませる必要が生じたのであろうか。そして、正面から私に読めと云つても読もうとしないのであろうことを察して、「読みたければ内証で読め、ここに鍵がある」と云っているのではなからうか。そうだとすれば、夫は私がつうの昔から鍵の所在を知っていたことを、知らずにいたと云うことになるのだろうか？ いや、そうではなく、「お前が内証で読むことを僕も今日から内証で認める。認めて認めないふりをしていてやる」と云うのだろうか？……

たとえそうであつたとしても、私は決して読みはしない。私は自分でここまでと極めている限界を超えて、夫の心理の中にまで這入り込んで行きたくない。私は自分の心の中に知らせることは好まないように、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることを好まない。ましてあの日記帳を私に読ませたがっているとすれば、その内容には虚偽があるかも知れない。……実は私も、今年から日記をつけ始めている。私のように心を他人に語らない者は、せめて自分自身に向つて語つて聞かせる必要がある。但し私は自分が日記をつけていることを夫に感づかれるようなへまはやらない。私はこの日記を、夫の留守の時を窺つて書き、絶対に夫が思いつかない或る場所に隠しておくことにする。私がこれを書く気になつた第一の理由は、私には夫の日記帳の所在が分かっているのに、夫は私が日記をつけていることさえも知らずにいる、その優越感がこの上もなく楽しいからである。(本文)

*

*

さて、「妻の日記」の冒頭は、「……一月四日。今日私は珍しい事件に出遇つた。三か日の間書斎の掃除をしなかつたので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入つたら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、ただ不用意にあの鍵をあんな風に落しておいたとは考えられない。夫は実に用心深い人なのだから。そして長年の間毎日日記をつけていながら、嘗て一度もあの鍵を落したことなくなかつたのだから」とある。——まず、正月の三か日は、夫の書斎の掃除をしなかつたので、「……今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入つた」とある。

これは、一体、何を意味するかと問えば、恐らく、夫は、午後になると(わざと)散歩に出かけ、その間に、妻に、日記を読ませようとしているのである。一方、妻は、その留守に「夫の書斎」の掃除をすることになっている。つまり、妻は妻で、夫の留守を狙つて、書斎の掃除をしているのである。それゆえ、妻に「その気」さえあれば、夫の「書斎の内部」を望むだけ事細かに調べることができ得るのである。そして、今日の午後、夫の「書斎」の中に入って見たら、何と「……書棚の前に鍵が落ちていた」ということである。それは、疑い深い、「詮索好き」な彼女にしてみれば、……これは、一体、どういう「謎かけ」なのかと考へてしまう。それは、本文では、「……(実に用心深い)その夫が今日その鍵をあんな所に落して行ったのはなぜであろうか。何か心境の変化が起つて、私に日記を読ませる必要が生じたのであろうか。そして、正面から私に読めと云つても読もうとしないであろうことを察して、『読みたければ内証で読め、ここに鍵がある』と云っているの

はなかるうか。そうだとすれば、夫は私がとうの昔から鍵の所在を知っていたことを、知らずにいたと云うことになるのだろうか？ いや、そうではなく、『お前が内証で読むことを僕も今日から内証で認める。認めて認めないふりをしていてやる』と云うのだろうか」と、まさに「あれこれと考えをめぐらせること」になるのである。

そして、「……私は勿論夫が日記をつけていることも、その日記帳をあの小机の抽出に入れて鍵をかけていることも、そしてその鍵を時としては書棚のいろいろな書物の間に、時としては床の絨毯の下に隠していることも、とうの昔から知っている。しかし私は知ってよいことと知ってはならないこととの区別は知っている。私が知っているのはあの日記帳の所在と、鍵の隠し場所だけである。決して私は日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない」と、一応、分別ある妻を装ってはいるが、実はそうではなく、夫の日記帳の中もしつかりと見ているのである。しかも、それは、何十年も前からであるが、それでは、なぜ、そのような「大うそ」を記しているのかと問えば、彼女自身、後述の方の「日記」の中で、次のように記しているのである。つまり、「……私が盗み読みをしていることを夫に秘していたのは、生来『知っていることでも知らない風を装う』のが好きであるためばかりではない。盗み読んでは貰いたいのだが、読んでも読まない風をしていくようにというのが、恐らくは夫の注文であるらしいことをも、察していたからである」とある。つまり、むしろ夫のために「読んでも読まない風をしていた」ということであり、また、夫は、私に彼の日記帳を読ませようとしているとしても、「……たとえそうであったとしても、私は決して読みはしない。私は自分でここまでと極めている限界を超えて、夫の心理の中にまで這入り込んで行きたくない。私は自分の心の中を人に知らせることは好まないように、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることを好まない」としているが、これに對しても、後述では、彼女は、「……私は自分の心の中を人に知らせることは好まないが、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることは（大）好きなのである。（その証拠には）、私は、彼と結婚したその翌日あたりから、ときどき彼の日記帳を盗み読む習慣を持ち始めていた。それゆえ、決して『日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない』どころではない。ただ今までは、われわれ夫婦の性生活につながりのある問題はあまり扱われていたことがなく、私には無味乾燥な学問的な事柄が多かったところから、めったに身を入れて見たことはなかったが、彼がそのことを記すようになった今年の正月一日の記から、私は当然の結果として彼の記述に惹き付けられるようになったということである。そして、「……実は私も、今年から日記をつけ始めている。私のように心を他人に語らない者は、せめて自分自身に向って語って聞かせる必要がある。但し私は自分が日記をつけていることを夫に感づかれるようなへまはやらない」とあるが、これは、当然、表向きのことであり、内心は、夫に「自分の日記」を読んでもらいたいのであり、そのための「逆説的な表現」になっているということである。

二、本文、その二

一昨夜は年の始め行事をした。……ああ、こんなことを筆にすると何と云う耻かしさであろう。亡くなった父は昔よく「独を慎む」と云うことを教えた。私がこんなことを書くのを知ったら、どんなにか私の墮落を嘆くであろう。……夫は例に依り歓喜の頂点に

達したらしいが、私は又例に依り物足りなかった。そしてその後の感じが溜らなく不快であった。夫は彼の体力が続かないのを耻じ、私に済まないと言うことを毎度口にする反面、夫に対して私が冷静過ぎることを攻撃する。その冷静と言う意味は、彼の言葉に従えば私は「精力絶倫」で、その方面では病的に強いけれども、私のやり方は余りにも「事務的」で、「ありきたり」で、「第一公式」で、変化がないと言うのである。平素何事につけても消極的で、控え目である私が、あのことにだけは積極的であるにも拘わらず、二十年來常に同じメソッド、同じ姿勢でしか応じてくれないと言うのである。……私は実利一点張り、情味がないのだそうである。僕がお前を愛している半分も、お前は僕を愛していないと、夫は云う。お前は僕を単なる必需品としか、——それも極めて不完全な必需品としか考えていない。お前がほんとうに僕を愛しているなら、もっと熱情があつてもよい筈だ。いかなる僕の註文にも応じてくれる筈だと云う。僕が十分にお前を満足させ得ない一半(半分)の責めはお前にある。お前がもっと僕の熱情をかき立てるようにしてくれば、僕だつてこんなに無力ではない。お前は一向そう云う努力をしようとせず、自ら進んでその仕事に僕と協力してくれない。お前は食いしんぼうの癖に手を拱いて据え膳の箸を取るこつばかり考えていると云い、私を冷血動物で意地の悪い女だとさえ云う。(本文)

*

*

さて、その年の始めの夫婦の行事「コトハジメ」であるが、妻は、「……ああ、こんなことを筆にすると何と云う耻かしさであろう。亡くなった父は、昔よく『独を慎む』と云うことを教えた。私がこんなことを書くのを知ったら、どんなにか私の墮落を嘆くであろう」とあるが、その「独を慎む」というのは、「……君子は人前だけではなく、独りで居る時にも言動を慎み、道にそむかないようにすること」とある。さて、その行事の結果であるが、それは、「……夫は例に依り歡喜の頂点に達したらしいが、私は又例に依り物足りなかった。そしてその後の感じが溜らなく不快であった」とある。まず、男性の場合、どのような形であつても、「射精」という経過を経れば、一応の「満足感」は得られるものである。一方、女性の場合であるが、女性の場合は、それぞれ個人差があるかと思ふが、結局は、一つは、「心が満たされる」こと、一つは、「肉体が満たされる」ことに尽きるのであり、彼女の場合は、「……私は又例に依り物足りなかった。そしてその後の感じが溜らなく不快であった」とある。これは、極めて貴重な「言葉」であり、まず、「……例に依り物足りなかった」とは、すなわち、「肉体は十分満足できるような所までは行かず、中途半端な状態で終わってしまった」ということであり、そして、「……その後の感じが溜らなく不快であった」とは、結局は、「身も心も自分が想うようには満たされなかつた」ということである。そして、これが、妻の「夫の性への最大の不満」であり、また、「……その後の感じが溜らなく不快であった」という、このことが、やがては夫婦の「セックスレス」が始まる一つの要因にもなり得るのである。つまり、「……するよりは、(むしろ)しないほうがましだ」という思いである。「……夫は彼の体力が続かないのを耻じ、私に済まないと言うことを毎度口にする反面、夫に対して私が冷静過ぎることを攻撃する」とある。その「冷静」という言葉の意味は、次のようなものであると云う。つまり、「……彼の言葉に従えば、私は『精力絶倫』で、その方面では病的に強いけれども、私のやり方は余りにも『事務的』で、『ありきたり』で、『第一公式』で、変化がないと云うのである。平素何事につけても消極的で、控え目である私が、あのことにだけ

は積極的であるにも拘わらず、二十年來常に同じメソッド（方法）、同じ姿勢でしか応じてくれないと云うのである。……私は実利一点張り、情味がないのだそうである。僕がお前を愛している半分も、お前は僕を愛していないと、夫は云う。お前は僕を単なる必要品としか、——それも極めて不完全な必要品としか考えていない。お前がほんとうに僕を愛しているなら、もっと熱情があつてもよい筈だ。いかなる僕の註文にも応じてくれる筈だと云う。僕が十分にお前を満足させ得ない一半（半分）の責めはお前にある。お前もつと僕の熱情をかき立てるようにしてくれれば、僕だつてこんな無力ではない。お前は一向そう云う努力をしようとせず、自ら進んでその仕事に僕と協力してくれない。お前は食いしんぼうの癖に手を拱いて据え膳の箸を取ることはばかり考えていると云い、私を冷血動物で意地の悪い女だとさえ云う。——これが、まさに夫の「妻の性に対する最大の不満」であり、もっと妻が協力的であつて、もっと妻が積極的であれば、僕だつてこんなに無力ではないのだと訴えているのである。それに対する妻の「応え」は、次のようなものである。

三、本文、その三

夫が私をそう云う眼で見ると一往無理のないところがある。だけど私は、女と云うものはどんな場合にも受け身であるべきもの、男に対して自分の方から能動的に働きかけてはならないもの、と云う風に、昔氣質の親たちからしつけられて来たのである。私は決して熱情がない訳ではないが、私の場合、私の熱情は内部に深く沈潜する性質の青白い熱情であり、燃え上る熱情ではないと云うことを、夫は理解してくれない。……この頃になつて私がつくづく感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、と云うことである。私にはもつと適した相手があつたであらうし、彼にもそうであつたらうと思う。私と彼とは、性的嗜好が反発し合つている点、余りにも多い。私は父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこう云うものと思つて過して来たけれども、今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思うから仕方なく忪えてくるものの、私は時々彼に面と向つてみて、何と云う理由もなしに胸がムカムカして来ることがある。そう、そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚の第一夜、彼と褥を共にしたあの晩からそうであつた。あの遠い昔の新婚旅行の晩、私は寢床に這入つて、彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、途端にゾウつと身慄いがしたことを、今も明瞭に思い出す。始終眼鏡をかけている人が外すと、誰でもちよつと妙な顔になるものだが、夫の顔は急に白っちゃけた、死人の顔のように見えた。夫はその顔を近々と傍に寄せて、穴の開くほど私の顔を覗き込んだものだつた。私も自然彼の顔をマジマジと見据える結果になつたが、その肌理の細かい、アルミニウムのようにツルツルした皮膚を見ると、私はもう一度ゾウツとした。だから私は彼の顔を見ないようにしようと思ひ、枕もとの電灯を消そうとするのだが、夫は反対に、あの時に限つて部屋を明るくしようとする。そして私の体じゅうの此処彼処を、能う限りハッキリ見ようとする。（私はそんな要求にはめつたに応じないことにしているけれども、足だけは余り執拗く云うので、已むを得ず見せる）。私は夫以外の男を知らないけれども、総体に男性と云うものは皆あのように執拗いのであらうか。あのアクドい、べたべたと纏

わりついてさまざまな必要以外の遊戯をしたがる習性は。すべての男子に通有（同じように備わっていること）なのであろうか。……（本文）

*

*

さて、妻は、「……夫が私をそう云う眼で見ると一往無理のないところがある」と、半分は認めているのである。だけど、「……私は、女と云うものはどんな場合にも受け身であるべきもの、男に対して自分の方から能動的に働きかけてはならないもの、と云う風に、昔氣質の親たちからしつけられて来たのである。私は決して熱情がない訳ではないが、私の場合、私の熱情は内部に深く沈潜する性質の青白い熱情であり、燃え上る熱情ではないと云うことを、夫は理解してくれない」と嘆くのである。——つまり、妻の熱情というのは、外に向かって自ら積極的に行動（言動）して行くような「燃え上る熱情」ではなくて、むしろ「内に深く秘めた青白い熱情」であり、それは、「……自分から積極的に行動（言動）して燃え上がるタイプ」の人間ではなくて、むしろ「相手に応じて燃え上がる（受け身的な）タイプ」の人間である、と云いたいのである。

そして、妻は、「……この頃になつて私がつくづく感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、と云うことである。私にはもつと適した相手があつたであらうし、彼にもそうであつたろうと思う。私と彼とは、性的嗜好が反発し合っている点が、余りにも多い。私は父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこう云うものと思つて過して来たけれども、今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思うから仕方なく忪えてゐるものの、私は時々彼に面と向つてみて、何と云う理由もなしに胸がムカムカして来ることがある。そう、そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚の第一夜、彼と褥を共にしたあの晩からそうであつた。あの遠い昔の新婚旅行の晩、私は寢床に這入つて、彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、途端にゾウつと身慄いがしたことを、今も明瞭に思い出す。始終眼鏡をかけている人が外すと、誰でもちよつと妙な顔になるのだが、夫の顔は急に白っちゃけた、死人の顔のように見えた。夫はその顔を近々と傍に寄せて、穴の開くほど私の顔を覗き込んだものだった。私も自然彼の顔をマジマジと見据える結果になつたが、その肌理の細かい、アルミニウムのようにツルツルした皮膚を見ると、私はまだ一度ゾウツとした。（これらは、まさに「生理的なもの」であり、本人にもどうしようもないところがあるのである）。だから私は彼の顔を見ないようにしようと思ひ、枕もとの電灯を消そうとするのだが、夫は反対に、あの時に限つて部屋を明るくしようとする。そして私の体じゆうの此処彼処を、能う限りハッキリ見ようとする」と続くのである。

そして、「……私は夫以外の男を知らないけれども」とあるが、それは、彼女自身、いわば「自分から積極的に行動するタイプの女性」ではないからであり、また、「……総体に男性と云うものは皆あのように執拗いのであるうか。あのアクドい、べたべたと纏わりついてさまざまな必要以外の遊戯をしたがる習性は。すべての男子に通有（同じように備わっていること）なのであろうか」と問いかけているが、それは、どういうことであれ、そういうことに「興味や関心」を持たず持つほどいろいろなことをしたがるだろつし、一方、そういうことにあまり「興味や関心」を持たないような人であれば、むしろあつさりとした感じになるのかも知れない。そういうことには、すべて「個人差」があるとともに、同じ人間であつても、環境の変化や年齢の推移などによつても、いろいろと変化していく

ものである。

三、夫の日記 一月七日（金）

一月七日。……今日木村が年始に来た。僕は本を読みかけていたので、ちよつと挨拶して書齋に上った。木村は茶の間で妻や敏子と暫く話していたが、三時過ぎに「麗しのサブリナ」を見に行くと言つて、二人で出かけた。そして木村は六時頃又一緒に帰って来て、僕ら家族と夕食を共にし、九時少し過ぎまで話して行つた。

食事の時、敏子を除く三人はブランドーを少量ずつ飲んだ。郁子は近頃酒量がやや増したように思う。彼女に酒を仕込んだのは僕だが、もともと彼女は行ける口なのだ。彼女は勧められれば黙って可なりの量を嗜む。酔うことは酔うが、その酔い方が陰性で、外に発せず、内攻し、いつまでもじつと泳いでいるので、人には分からないことが多い。今夜は木村がチェリーグラスに二杯半まで彼女にすすめた。妻はいくらか青い顔をしていたが、酔つた様子は見えなかつた。却つて僕や木村の方が紅い顔になつた。木村はそんなに強くはなく、妻より弱いくらいである。妻が僕以外の男からブランドーの杯を受けたのは、今夜が初めてではないだろうか。木村は最初敏子に差したのだが、「私はだめです、どうかママにお酌なすつて」と敏子が云つたからであつた。

僕はかねてから、敏子が木村を避ける風があることを感じていたが、それは木村が彼女よりは彼女の母に親愛の情を示す傾向があることを、彼女も感づくに至つたからではないだろうか。ふつう妻は来客に対しては無愛想で、殊に男の客人には会いたがらないのであるが、木村にだけは親しむのである。敏子も、妻も、僕も、未だ嘗て口に出したことはないが、木村はジェームズ・スチュアートに似ている。そして僕の妻は、ジェームズ・スチュアートが好きであることを僕は知っている。（妻はジェームズ・スチュアートの映画だと欠かさず見に行くらしいのである）尤も妻が木村に接近するのは、僕が彼を敏子に妻わせてはどうかと云う考えがあつて、家庭に出入りさせるようにし、妻にそれとなく二人の様子を見るようにと命じたからである。ところが敏子はこの縁談にはどうも気乗りがしてないらしく、彼女はなるべく木村と二人きりになる機会を作らぬようにし、いつも殆んど郁子と三人で茶の間で話し、映画を見るにも必ず母を誘つて出かける。「お前がついて行くから悪い、二人きりで出して見なさい」と云うのだが、妻はそれには不賛成で、母親として監督する責任があると云う。「それはお前の頭が時代おくれだからだ、二人を信用したらよいのだ」と云うと、「私もそう思うのですが、敏子がついて来てくれと云うのです」と云う。事実敏子がそう云うのだとすれば、それは自分よりも母の方が木村を好んでいるところから、むしろ自分が母のために仲介の労を取ろうとしているのではあるまいか。僕はなんとなく、妻と敏子の間には暗黙の示し合わせがあるような気がしてならない。少くとも妻は、自分では意識していないのかも知れないが、自分では若い二人を監督しているつもりかも知れないが、実際は木村を愛しているように思えてならない。（本文）

*

*

さて、いよいよ「木村」という人物の登場であるが、それは、次のような「内容」からである。つまり、——「一月七日。……今日木村が年始に来た。僕は本を読みかけていたので、ちよつと挨拶して書齋に上った。木村は茶の間で妻や敏子と暫く話していたが、

三時過ぎに『麗しのサブリーナ』を見に行くと言つて、三人で出かけた。そして木村は六時頃又一緒に帰つて来て、僕ら家族と夕食を共にし、九時少し過ぎまで話して行つた」とある。――まず、「木村」という人物であるが、この人の「設定」は意外に難しく、それは、「年齢は何歳で、職業は何か」がはっきりと「明記」されていない。「木村」だけ「幅を持たされている」が、恐らく、職業は、学校の先生（高校三年の担任）で、年齢は、娘（敏子）より少なくとも上の、三〇歳前後の三〇代前半ぐらいかと思う。

つまり、夫（大学教授）は、五十六歳であり、妻（郁子）は、四十五歳である。また、娘（敏子）は、二十五歳であり、そして、木村（若い教師）は、恐らく、三〇歳前後の三〇代前半ぐらいの「若い教師」（高校三年の担任）という「設定」になるかと思う。そして、その「木村」という人物は、夫（大学教授）をはじめ、妻（郁子）や娘（敏子）ともかなり「親しい関係」であり、それゆえ、三人で「一緒に」「映画」を観たり、また、「……僕ら家族と夕食を共にし、九時少し過ぎまで話して行つた」ということである。

そして、「……食事の時、敏子を除く三人はブランデーを少量ずつ飲んだ。郁子は近頃酒量が増したように思う。彼女に酒を仕込んだのは僕だが、もともと彼女は行ける口なのだ。彼女は勧められれば黙ってかなりの量を嗜む。酔うことは酔うが、その酔い方が陰性で、外に発せず、内攻し、いつまでもじつと泳いでいるので、人には分からないことが多い。今夜は木村がチェリーグラスに二杯半まで彼女にすすめた。妻はいくらか青い顔をしていたが、酔った様子は見えなかった。却つて僕や木村の方が紅い顔になった。木村はそんなに強くはなく、妻より弱いくらいである。妻が僕以外の男からブランデーの杯を受けたのは、今夜が初めてではないだろうか。木村は最初敏子に差したのだが、『私にだめです、どうかママにお酌なすつて』と敏子が云つたからであつた」とある。

さて、夕食の時、娘（敏子）を除く、夫と妻それに木村の「三人」で、酒（ブランデー）を飲むようになる。それと、妻は、「……彼女は勧められれば黙ってかなりの量を嗜む。酔うことは酔うが、その酔い方が陰性で、外に発せず、内攻し、いつまでもじつと泳いでいるので、人には分からないことが多い」とある。この「二つの組み合わせ」から、一つの「大きな事件」が起こることになるが、それは、後述として、「……僕はかねてから、敏子が木村を避ける風があることを感じていたが、それは木村が彼女よりは彼女の母に親愛の情を示す傾向があることを、彼女も感づくに至つたからではないだろうか。ふつう妻は来客に対しては無愛想で、殊に男の客人には会いたがらないのであるが、木村にだけは親しむのである」とある。つまり、「妻」（郁子）は、「木村」に対しては「はっきりと「好感」を持つているのである。しかも、「……敏子も、妻も、僕も、未だ嘗て口に出したことはないが、木村はジェームズ・スチュアートに似ている。そして、僕の妻は、ジェームズ・スチュアートが好きであることを僕は知っている。妻は、ジェームズ・スチュアートの映画だと欠かさず見に行くらしいのである」とある。つまり、「木村」という人物は、妻にとって見た目も理想的な、まさに「若くて逞しいハンサムな男性」であつたのである。それをもちつと言えば、妻は、生まれて初めて「恋愛感情」に襲われているのである。

もつとも、「……妻が木村に接近するのは、僕が彼を敏子に妻わせてはどうかと云う考えがあつて、家庭に出入りさせるようにし、妻にそれとなく二人の様子を見るようにと命じたからである」とある。――つまり、まず、夫（大学教授）は、「木村」という人物が気に入つていて、そこで、娘（敏子）の「結婚相手」にどうだろうかと思えるようになり、

その結果、「木村」という人物を「家庭」に入り、させるようになった」ということである。それゆえ、「娘」(敏子)と「木村」とはもともと「恋愛関係」があつて、それで「家庭」に入りしているのではないのである。そして、「……それとなく二人の様子を見るようにと命じられている」のが、まさに妻の「郁子」になるのである。一方、「……敏子は、この縁談にはどうも気乗りがしてないらしく、彼女はなるべく木村と二人きりになる機会を作らぬようにし、いつも殆んど郁子と三人で茶の間で話し、映画を見るにも必ず母を誘つて出かける」とある。それは、妻は妻で母親として「二人」を監督する責任があると云い、一方、娘は娘で母親と一緒に来てくれと云うのである。それは、「……自分より母の方が木村を好いているので、むしろ自分が母のために仲介の労を取ろうとしている」とあるが、「敏子」の本心は、ここではまだよく分からない。一方、夫(大学教授)は、「……僕はなんとなく、妻と敏子の間には暗黙の示し合わせがあるような気がしてならない。少くとも、妻は、自分では若い二人を監督しているつもりかも知れないが、実際は木村を愛しているように思えてならない」とある。そして、この「予感」は、やがては「現実」となってしまうのである。

四、妻の日記 一月八日(土)

一月八日。昨夜は私も酔つたけれども、夫は一層酔っていた。夫は近頃あまり強要したことのない眼瞼の上の接吻を、してくるようにとしきりに迫つた。私もブランドーの加減で少し常軌を逸したので、フラフラと要求に応じた。それはよいが、接吻するついでに、あの見てはならないものを、——彼の眼鏡を外した顔を、ついウツカリして見ってしまった。私はいつも眼瞼に接吻を与える時は、自分も眼をつぶるようになっているのだが、昨夜は途中で眼を開けてしまった。あのアルミニウムのような皮膚が、キネマスコップで大映しにして見るように巨大に私の目の前に立ち塞がった。私はゾウツと身慄いをした。そして、自分の顔が急に青ざめたのを感じた。でもよいあんばいに、夫は眼鏡をすぐにかけた、例によつて私の手足を事細かに眺めるために……

私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している。私は夫とほんとうは性が合わないのだけれども、だからといって他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生れつきできない。私は夫のあの執拗な、あの変態的な愛撫の仕方にはホトホト当惑するけれども、そういつても彼が熱狂的に私を愛していてくれることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければ済まないと思う。ああ、それにつけても、彼にもう少し昔のような体力があつてくれたらば、……一体どうして彼はあんなにあの方面の精力が減退したのであろうか。……彼に云わせると、それは私あまり淫蕩に過ぎるので、自分もそれにつり込まれて節度を失つた結果である、女はその点不死身だけれども、男は頭を使うので、ああいうことがじきに体にこたえるのだという。そう云われると恥かしいが、しかし私の淫蕩は体質的のものなので、自分でもいかんともすることができないことは、夫も察してくれるであろう。夫が真に私を愛しているのならば、やはり何とかして私を喜ばしてくれなければいけない。ただくれぐれも知っておいて貰いたいのは、あの不必要な悪ふざけだけは我慢がならないということ、私にとつてあんな遊びは何の足しにもならないばかりか、かえつて気分を損うばか

りだということ、私は本来は、どこまでも昔風に、暗い奥深い闇の中に垂れ籠めて、分厚い褥しとねに身を埋めて、夫の顔も自分の顔も分らないようにして、ひっそりと事を行いたいのだということ、である。夫婦の趣味がこの点でひどく食い違っているのはこの上もない不幸であるが、お互いに何か妥協点を見出す工夫はないものだろうか。(本文)

*

*

さて、この部分は、まさに「記述の通り」であるが、気になるのは、「……私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している。私は夫とほんとうは性が合わないのだけれども、だからといって他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生れつきできない。私は夫のあの執拗な、あの変態的な愛撫の仕方にはホトホト当惑するけれども、そういつても彼が熱狂的に私を愛してくれていることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければ済まないと思う。ああ、それにつけても、彼にもう少し昔のような体力があってくれたらば」とある。気になるのは、「……私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している」という「言葉」であり、まず、妻が、「……夫を半分は激しく嫌っている」のは、それは、もともと生理的に「性の合わない相手」だからであり、それゆえ、好きになろうといくら努力してもどうにもならないところがあるのである。一方、「……半分は激しく愛している」のは、それは、「……彼が熱狂的に私を愛してくれていることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければ済まないと思う」とある。つまり、「……私を何とか満足させてやろうと一生懸命に必死に努力をしているところ」を愛しているのである。ただ、最近では、「……ああ、それにしても、彼にもう少し昔のような体力があってくれたらば」と思うようになってきている。しかし、「……だからといって他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生れつきできない」と、ここではそう言い張っているが、やがては「木村」という「若くて逞しいハンサムな男性」の方へと「身も心」を惹かれていくような結果になってしまっているのである。

ちなみに、「……私は本来は、どこまでも昔風に、暗い奥深い闇の中に垂れ籠めて、分厚い褥しとねに身を埋めて、夫の顔も自分の顔も分らないようにして、ひっそりと事を行いたいのだということである。夫婦の趣味がこの点でひどく食い違っているのはこの上もない不幸であるが、お互いに何か妥協点を見出す工夫はないものだろうか」とあるが、この「問題」に対しては、やがて、夫は、「木村」を「刺激剤」として利用し、また、妻は、「ブランドー」という媚酒びしゆに酔って、風呂場で倒れるという、そのような「半睡半醒」の状態はんすいはんせいで事を行なうことよって、「二人」とも満足が得られるという「妥協点」を見い出すことになるのである。さらに、木村と「親密な関係」を持つようになると、妻(郁子)は、今度は夜ではなく、むしろ、昼間、明るいところで、木村と「肉体関係」を持ちたいと思うようになるのである。つまり、女性の場合、男性が変われば、女性は、その相手に応じて、大きく「変化していく」ことが非常に多いということである。

五、夫の日記 一月十三日(木)

一月十三日。……四時半頃に木村が来た。国から鱧子からすみが届きましたから持って来ましたと云って、そのあと一時間程三人で話して帰りかける様子だったので、僕は下へ降りて行

って、飯を食って行けと引き留めた。木村は別に辞退せず、では御馳走になりますと云って座り込んだ。食事の支度が出来た間、僕は又二階に上っていたが、敏子が一人で台所の用事を引き受けて、妻は茶の間に残っていた。御馳走と云ってもありあわせのものしかなかったが、酒の肴には到来の鱈子と、昨日妻が錦の市場で買って来た鮎鮓があったので、すぐブランドーになった。妻は甘い物が嫌い、酒飲みの好く物が好き、なかならず鮎鮓が好きだ。——僕は両刀使いただけけれども、鮎鮓はあまり好きでない。家中で妻以外にあれを食う者はいない。長崎人の木村も鱈子は好きだが、鮎鮓は御免だと云っていた。——木村は土産物なんか提げてきたことはないのだが、今日は始めから晩の食事を共にする底意があったのである。僕は彼の心理状態が今のところよく分からない。郁子と敏子と、彼自身はどっちに惹かれていたのであるか。もし僕が木村であったとして、どっちに余計惹き付けられるかと云えば、それは、年は取っているけれども母の方であることは確かだ。だが木村はどうとも云えない。彼の最後の目的は却って敏子にあるのかも知れない。敏子がそれほど彼の結婚に乗り気でないらしいので、さしあたり母の歡心を買ひ、母を通じて敏子を動かそうとしている？——いやそんなことよりも、僕自身はどんなつもりなのだろう。どんなつもりで今夜も木村を引き留めたのだろうか。この心理は我ながら奇妙だ。先日、七日の晩に僕はすでに木村に対して淡い嫉妬（淡くもなかったかも知れない）を感じつつあったのに、——いやそうではない、それは去年の暮あたりからだ。——その反面、僕はその嫉妬を密かに享樂しつつあった。と云えないだろうか。元来僕は嫉妬を感じるとあの方の衝動が起るのである。だから嫉妬は或る意味に於いて必要でもあり快感でもある。あの晩僕は、木村に対する嫉妬を利用して妻を喜ばすことに成功した。僕は今後われわれ夫婦の性生活を満足に続けて行くためには、木村と云う刺激剤の存在が欠くべからざるものであることを知るに至った。しかし妻に注意したいのは、云うまでもないことだけれども、刺激剤として利用する範囲を逸脱しないことだ。妻はずいぶんきわどい所まで行ってよい。きわどければきわどい程よい。僕は僕を、気が狂うほど嫉妬させてほしい。事に依ったら範囲を踏み越えたのではあるまいかと、多少疑いを抱かせるくらいであってもよい。そのくらいまで行くことを望む。僕がこのくらいに云っても、とても彼女は大胆なことは出来そうもないけれども、そう云う風にして努めて僕を刺激してくれることは、彼女自身の幸福のためでもあると思つて貰いたい。（本文）

*

*

さて、木村が、午後四時半頃 長崎の名物「鱈子」を手土産にやってくる。この「午後四時半と鱈子」ということになれば、当然のことながら、やがて、「夕食」の時間になるとともに、その時に、教授と奥さんそれに自分の「三人」でいつものように「酒」（ブランドー）を飲むことを期待しているのである。——ところで、夫は、「……僕は彼の心理状態が今のところよく分からない。郁子と敏子と、彼自身はどっちに惹かれているのであろうか。もし僕が木村であったとして、どっちに余計惹き付けられるかと云えば、それは、年は取っているけれども母の方であることは確かだ。だが木村はどうとも云えない。彼の最後の目的は却って敏子にあるのかも知れない。敏子がそれほど彼の結婚に乗り気でないらしいので、さしあたり母の歡心を買ひ、母を通じて敏子を動かそうとしている？」とある。——例えば、木村が「奥さんに心惹かれてる」のは確かである。とは言え、奥さんに「軽々しく手を出すこと」はできない。なぜなら、それは「すべてを失うこと」にな

るからである。例えば、「……教授の信頼も、敏子の心も、教師の職も、最後は、郁子まで、世間の非難とともに、すべてを失うことになる」からである。それは避けねばならない。それゆえ、木村は実に「慎重な態度」を取り続けるのである。「木村」という人物は、教授の「血圧」が高いことは何となく気づいているので、酒やセックスに溺れ、それに妻と自分との関係に深く嫉妬している教授であれば、遅かれ早かれ、何らかの「病氣」(脳溢血)などで倒れるだろうと見通していたのである。夫は、「……彼の最後の目的は却つて敏子にあるのかも知れない」と記しているが、彼の「最終の目的」は、むしろ「敏子と郁子」それに自分(木村)の三人」で一緒に住むことであつたのかも知れない。……

さらに、夫は、彼の「頭の中」(或いは「心の中」)で「自問自答」を繰り返すが。それは、「……いやそんなことよりも、僕自身はどんなつもりなのだろう。どんなつもりで今夜も木村を引き留めたのだろう。この心理は我ながら奇妙だ。先日、七日の晩に僕はすでに木村に対して淡い嫉妬(淡くもなかったかも知れない)を感じつつあつたのに、——いやそうではない、それは去年の暮あたりからだつた。——その反面、僕はその嫉妬を密かに享樂しつつあつた。と云えないだろうか。元来僕は嫉妬を感じるとあの方の衝動が起るのである。だから嫉妬は或る意味に於いて必要でもあり快感でもある。あの晩、僕は、木村に対する嫉妬を利用して妻を喜ばすことに成功した。僕は今後われわれ夫婦の性生活を満足に続けて行くためには、木村と云う刺激剤の存在が欠くべからざるものであることを知るに至つた」とある。しかし、「……妻に注意したいのは、云うまでもないことだけれども、刺激剤として利用する範囲を逸脱しないことだ」とある。そして、「……妻はいふんきわどい所まで行ってよい。きわどければきわどい程よい。僕は僕を、気が狂うほど嫉妬させてほしい。事に依つたら範囲を踏み越えたのではあるまいかと、多少疑いを抱かせるくらいであつてもよい。そのくらいまで行くことを望む」という、あの余りにも有名な「言葉」が、まさにここに現出する(現れ出る)のである。むろん、云うまでもないことだが、「妻」は、この「日記」を読んでいるはずであり、それゆえ、この夫の「考え方」に自然と寄り添いながら、妻は、(或いは木村も敏子も)、「行動」(言動)していくことになるのである。

六、夫の日記 一月十七日(月)

一月十七日。……木村はあれきりまだ来ないが、僕と妻とはあれから毎晩ブランデーを用いつつある。妻はすすめれば随分行ける。僕は妻が一生懸命酔いを隠して冷たい青ざめた顔をしているのを見るのが好きだ。妻のそうしている様子に何とも云えない色気を感じる。僕は彼女を酔いつぶして寝かしてしまおうと云う底意もあつたが、どうして彼女はその手には乗らない。酔うとますます意地が悪くなり、足に触らせまいとする。そして自分の欲することだけを要求する。(本文)。——ここで大事なことは、夫婦で毎晩ブランデーを飲むようになっていて、しかも、「……僕は彼女を酔いつぶして寝かしてしまおうと云う底意もあつた」というところである。

七、妻の日記 一月二十日(木)

一月二十日。今日は一日頭痛がしている。二日酔いというほどではないが、昨日は少し過ぎたらしい。……だんだん私のブランドーの量が殖えて行くのを木村さんは心配している。近頃は二杯以上はお酌をしない。「もう好い加減になすつたら」と、止める方に廻ろうとする。夫は反対に、前より一層飲ませたがる。差されれば拍まない癖を知っているので、いくらでも飲ますつもりらしい。でももうこの辺が極量である。夫や木村さんの見ている前で取り乱したことは一度もないが、酒を殺して飲むために後が苦しい。私は用心した方がよい。(本文)。——さて、この「日記」では、妻の「酒量」がどんどん増えて、ほとんど「極量」に達しているという「前振り」をしておいて、次のような「事件」が起こるべくして、恐らく、夫の「思惑通り」(木村の思惑ではなく)発生するという展開になるのである。

八、夫の日記 一月二十八日(金)

一月二十八日。……今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行って、暫く戻って来ないので、「どうなすつたのでしょう」と木村が云い出した。妻はブランドーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、「なに、今に戻ってくるよ」と僕は云っていたが、あまり長いので木村は氣を揉んで呼びに云った。そして間もなく、「お嬢さん、ちよつと変だからいらつしつてください」と、廊下から敏子を呼んだ。——敏子は今夜も程よいところで自分だけさつさと食事を済まして部屋に引き取っていた。——「おかしいですよ、奥さんが何処にもいらつしやらないらしいです」と云うので、敏子が捜すと、妻は風呂場に漬かたまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。「ママ、こんな所で寝ないですよ」と云っても返事をしない。「先生、大変です」と木村が飛んで来て知らせた。僕は流し場に下りて脈を取って見た。脈拍が微弱で、一分間に九十以上百近くも打っている。僕は裸体になって浴槽に這入り、妻を抱えて浴槽の板の間に臥かした。敏子は大きなバスタオルで母の体を包んでやっつてから、「とにかく床を取りましょう」と云って寝室へ行った。木村はどうしてよいか分からず、浴室を出たり入ったりうろろしていたが、「君も手を貸してくれたまえ」と云うと安心してこのこ這入ってきた。「早く拭いてやらないと風邪を引く、済まないが手伝ってくれたまえ」と云って、二人で乾いたタオルを持って濡れた体を拭き取ってやった。(こんな咄嗟の間合にも僕は木村を「利用」することを忘れなかつた。僕は彼に上半身を与え、自分は下半身を受け持った。僕は足の指の股までもきれいに拭いてやり、「君、その手の指の股を拭いてやってくれたまえ」と木村にも命じた。そしてその間にも木村の動作や表情を油断なく観察した)敏子が寝間着を持ってきたが、木村が手伝っているのを見ると、「湯タンポを入れるわ」と云って直ぐ又出て云った。僕と木村は二人で郁子に寝間着を着せて寝室へ運んだ。「脳貧血かも知れませんが、湯タンポはお止めになった方がよくはないですか」と木村が云った。医者を呼ぼうかどうかと暫く二人で相談した。僕は児玉氏なら差支えないと思つたけれども、それでも妻のこう云う醜態を見せるのは好ましくなかつた。が、心臓が弱っているようなので、結局来て貰つた。やはり脳貧血だそうで、「ご心配はありません」と云って、ヴィタカンフルの注射をして児玉氏が帰って行ったのは、夜中の二時であつた。(本文)

*

*

それでは、この有名な「場面」のまさに「謎解き」をしてみたいと思うが、それは、次のようなことである。——まず、今夜、「……木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行って、暫く戻って来なかった」とある。その場合、「……敏子は今夜も程よいところで自分だけさきさと食事を済まして部屋に引き取っていた」ので、実際は、夫と妻と木村の「三人」でいつものように「酒」(ブランデー)を飲んでいたら、彼女(妻)が何処かへ立って行って、暫く戻って来なかったということである。そこで、木村が「どうなすったのでしょ」と言い出すと、夫は、「……妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがある」ので、「なに、今に戻ってくるよ」と云うのであった。これは、一体、何を意味するのかと問えば、これは、すべて「夫の迷惑通り」に事が進んでいるということである。——つまり、夫は、木村がいる時を狙って、妻に「極量」の「酒」(ブランデー)を飲ませ深く酔わせれば、必ず、便所に駆け込むことを知っていたのである。そして、夫の「計画」では、恐らく、妻は「便所」の中にうずくまって寝ているだろうから、そこで、木村の手を借りて、「二人」で「妻」を寝室まで運び込む予定だったのである。それは、一体、何のためかと問えば、それは、妻が深く寝入っている間に、妻の「糸纏わぬ裸体」をスタンドの明るい「蛍光灯」でまさに隅々まで見てみたいという「強い欲求」があったからである。……というのも、妻は、その「情事」の時ですら、夫に必要なだけの「裸体」しか見せようとはしないからである、それは、まさに「妻の秘密主義」の一つでもあるが、それゆえ、夫は、結婚をしてこのかた二十数年も妻の「糸纏わぬ裸体」の隅々までを一度も見ることがないのである。

ところが、夫の「迷惑」とは違って、妻は、便所の中ではなく、木村に呼ばれて、敏子が捜してみると、何と「……妻は風呂場に漬かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた」のである。これは、夫にも「意外だった」のか？ それとも、ここまですべて計算に入れていたのか？ それは、何とも判別し難いが、どちらであれ、ともかく、木村を呼んで、「二人」で「妻」を寝室まで運ぶことがその真の目的なのである。——それでは、妻は、なぜ、風呂場で湯に漬かっていたのだろうか？ それは、彼女自身の一月三十日の「日記」の中では、次のように記されている。

つまり、「……一体、一昨日の夜はどうしてあんなに酔ったのかしら。体の具合もいくらかあったに違いないが、一つにはブランデーがいつものスリースタースではなく、夫はあの日新しいのを一本買って来たのだが、ブランデー・オブ・ナポレオンと書いてあった。私には大層口あたりが良かったので、つい度を過した。私は人に酔ったところを見られるのが嫌なので、飲み過ぎて気分が悪くなると便所へ閉じ籠もる癖があるのだが、あの晩もそうであった。私は何十分間ぐらい便所に籠っていたのだろうか。何十分？ いや一時間も二時間ではなかったろうか。私はちっとも苦しくはなかった。苦しいよりは恍惚とした気持だった。意識はぼんやりしていたけれども全然覚えがないわけではなく、ところどころ分っている部分もある。あまり長時間便器に跨って蹲踞っていたので、腰や脚が疲れて、いつの間にか金隠しの前に両手をついてしまい、とうとう頭までべったり板の間についてしまったことも、うろ覚えに思い出される。そして私は体じゅうが便所臭くなった気がして外へ出たのであったが、その臭気を洗い落すつもりだったのか、まだ足もとがふらついているので人に遇うのが嫌だったのか、そのまま風呂場へ行って着物を脱いだ

のであったらしい。何か遠い夢の中の出来事のように記憶に残っているのだが、それから先はどうなったのか思い出せない」とある。

まず、「……一体、一昨日の夜はどうしてあんなに酔ったのかしら。体の具合もいくらかあったに違いないが、一つにはブランドーがいつものスリースターズではなく、夫はあの日新しいのを一本買って来たのだが、ブランドー・オブ・ナポレオンと書いてあった」とある。これこそは、妻の「風呂場事件」というものは、偶発的なものではなく、むしろ夫のはつきりとした「計画」に基づくものという何よりの「証拠」の一つになり得るものである。次に、妻は、「……飲み過ぎて気分が悪くなると便所へ閉じ籠もる癖があるのだが、あの晩もそうであった」とある。夫は、この妻の「癖」をはつきりと知っていたのである。そして、「……あまり長時間便器に跨って蹲踞していたので、腰や脚が疲れて、いつの間にか金隠しの前に両手をつけてしまい、とうとう頭までべったり板の間についてしまっていたことも、うろ覚えに思い出される。そして私は体じゅうが便所臭くなった気がして外へ出たのであったが、その臭気を洗い落すつもりだったのか、まだ足もとがふらついているので人に遇うのが嫌だったのか、そのまま風呂場へ行って着物を脱いだのであったらしい」とある。さて、ここで大事なことは、「……私は体じゅうが便所臭くなった気がして外へ出たのであったが、その臭気を洗い落すつもりだったのか」、それとも、「……まだ足もとがふらついているので人に遇うのが嫌だったのか」、その「どちらかの理由」（或いは「その両方の理由」）から、妻は、「……そのまま風呂場へ行って着物を脱いだのであったらしい」となるのである。

さて、ここで最も「熟慮すべきこと」は、次のようなことであり、それは、今回のようなことは、「……これまでにも何度かあったのか？ それとも、今回が初めてのことなのか？」ということである。もし、何度かあったとすれば、夫は、当然のことながら、このようなことになることを知っていたことになり、知っていたとすれば、夫は、妻に「酒」（ブランドー）をたらふく飲ませれば、必ず、妻は便所へと駆け込み、そして、その便所の中に長く居ればいるほど、恐らく、体じゅうが便所臭くなったような気がして、その臭気を洗い落すためにも、そのまま風呂場へ行って着物を脱ぐであろう」と、夫は、まさに「ここまですべて見越していた」ことになるのである。……もちろん、それは、「便所の中」であっても、また、「風呂場の中」であっても、そのどちらであっても、大事なことは、妻が「酔いっぶれて深く寝入ること」であり、その「深く寝入った妻」を、木村の手を借りて、まさに「寝室」まで運び込むことこそ、まさに真の「目的」になるのである。

ところで、妻が倒れた「風呂場」から二人で「寝室」へと運び込むまでの「詳細」は、「本文」を読んでもらいたいと思うが、その本文の中で気になるのは、「……夫は、木村に手伝ってくれたまえと云って、二人で乾いたタオルを持って濡れた体を拭き取ってやった。こんな咄嗟の間合にも僕は木村を『利用』することを忘れなかった。僕は彼に上半身を与え、自分は下半身を受け持った。僕は足の指の股までもきれいに拭いてやり、木村には、手の指の股を拭いてやってくれたまえと命じた。そして、その間にも木村の動作や表情を油断なく観察した」とある。——まず、考えられることは、ふつうであれば、夫や娘が濡れた妻の体をすべてタオルで拭き取って、木村には妻を「寝室」へと運び込む時だけ手伝ってもらおうというのが、恐らく、一般的な方法かと思うが、夫は、そうではなく、木村にわざわざ「妻の濡れた体」をタオルで拭き取らせ、しかも、その妻の「手の指の股ま

でも拭いてやってくれたまえ」と命じているのである。つまり、夫は、妻の「裸体」に木村の手が直接ふれるようなことを敢えてさせているのである。その「目的」は、一体、何かと問えば、それは、もちろん、「……その間にも木村の動作や表情を油断なく観察する」ためであるが、それは、木村の「本心」が、一体、どこにあるのか？ 敏子の方にあるのか？ それとも、妻（郁子）の方にあるのか？」を、はっきりと見極めたいとともに、木村に「妻の裸体」を見せたり触らせることで、木村を妻に接近させて、自分の「嫉妬心」をどこまでも掻き立てて、最終的には妻との「性交」の時に、その「嫉妬心の力」を最大限利用しようとするためなのである。

九、妻の日記、一月二十九日（土）

一月二十九日。昨夜飲み過ぎて苦しくなり便所に行ったことまでは記憶にある。それから風呂場へ行って倒れたことも微かに思い出すことができる。それ以後のことはよく分らない。今朝明け方に眼が覚めてみたら誰かが運んでくれたのだと見えてベッドに寝ていた。今日は終日頭が重くて起き上げる気力がない。覚めたかと思うとまたすぐ夢を見て一日じゅうウトウトしている。夕方少し心持が回復したので、辛うじて日記にこれだけ書きとめる。これからまたすぐ寝るつもり。（本文）。——さて、ここで留意すべき点は、妻の「本心」は、一体、どこにあるのか？ ということである。つまり、妻は、何一つ「意図せず」にこのようなことになったのか？ それとも、何らかの「思惑」はあって、妻は、「……風呂場に漬かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていたのか」、……例えば、夫の計画にふと気づいて、夫がその気であるならば、その夫の「意」に添うような形でこのような姿態になっているのか？ このようなことも、一応は考慮に入れておくべきことなのである。

十、夫の日記 一月二十九日（土）

一、本文 その一

一月二十九日。……妻は昨夜の事件以来まだ一遍も起きた様子がない。昨夜僕は木村と彼女を風呂場から寝室へ運んだのが十二時頃、児玉氏を呼んだのが〇時半頃、氏が帰ったのが今暁の二時頃、氏を送って出る時外を見たら美しい星空であったが寒気は凛烈であった。寝室のストーブはいつも寝る前一つかみの石炭を投げ込んでおけばそれで大体ぬくまるのだが、「今日は暖かにして上げた方がようござんすね」と木村が云うので、彼に命じて多量に石炭を投げ込ませた。木村は「ではどうぞお大事に。僕は帰らして貰います」と云ったが、こんな時刻に帰らせる訳に行かない。「寝具はあるから茶の間で泊まって行きたまえ」と云ったが、木村はどうしても帰ると云い、「いえ何でもありません何でもありません」と云ってとうとう帰って行った。僕は先刻から或る計画が心に浮かびつつあったので、内心は木村が帰ってくれることを願っていたのだった。僕は彼が帰ってしまい、敏子もはや現われる恐れがないのを確かめると、妻のベットに近づいて、彼女の脈を取って見た。ヴィタカンフルが利いたと見えて、脈は正常に搏ちつつあった。見たところ、

彼女は深い深い睡りに落ちていように見えた。——彼女の性質から推して、果たしてほんとうに睡っていたのか寝たふりをしていたのか、その点は疑わしいが、寝たふりをしていゝのならそれでも差支えないと思つた。——僕は先ずストーブの火を一層強く、かすかにごうごう鳴るくらい燃やした。それから徐々にフローアスタンドのシェードの上に被せてあつた黒い布の覆いを除いて室内を明るくした。フローアスタンドを静かに妻の寝台の側近くに寄せて、彼女の全身が明るい光の輪の中に入るような位置に据えた。僕の心臓は俄に激しく脈搏ちつつあるのを感じた。僕がかねてから夢みていたことが今夜こそ実行出来ると思ひ、その期待で興奮した。僕は足音を忍ばせて一旦寢室を出た。二階の書斎のデスクから蛍光灯ランプを外して、それを持つて戻つて来て、ナイトテーブルの上に置いた。このことは僕が疾うから考へていたことであつた。——僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う欲望に燃えていたのだつた。このことは蛍光灯と云うものの存在を知つた時からの妄想だつたのだ。(本文)

*

*

さて、妻の「風呂場事件」が起きて、木村と「二人」で妻を「寢室」へと運んだのが十二時頃、それから児玉医師を呼んだのが午前〇時半頃、そして、診察を終えて、児玉医師が帰つたのが午前二時頃とある。それから、木村には泊まるように云つたが、木村はどうしても帰ると云ひ、とうとう帰つて行つた。さて、ここからが「本題」になるが、それは、次のようなことである。——つまり、「……僕は先ずストーブの火を一層強く、かすかにごうごう鳴るくらい燃やした。それから徐々にフローアスタンドのシェードの上に被せてあつた黒い布の覆いを除いて室内を明るくした。フローアスタンドを静かに妻の寝台の側近くに寄せて、彼女の全身が明るい光の輪の中に入るような位置に据えた。僕の心臓は俄に激しく脈搏ちつつあるのを感じた。僕がかねてから夢みていたことが今夜こそ実行出来ると思ひ、その期待で興奮した。僕は足音を忍ばせて一旦寢室を出た。二階の書斎のデスクから蛍光灯ランプを外して、それを持つて戻つて来て、ナイトテーブルの上に置いた。このことは僕が疾うから考へていたことであつた。——僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う欲望に燃えていたのだつた。このことは蛍光灯と云うものの存在を知つた時からの妄想だつたのだ」とある。

まず、夫の「頭の中」(或いは「心の中」)には、前々から、「……僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う欲望に燃えていたのだつた。このことは蛍光灯と云うものの存在を知つた時からの妄想だつたのだ」とある。——つまり、夫は、今夜、初めて「このようなこと」を「思い付いた」のでは決してなく、実は、夫の「頭の中」(或いは「心の中」)にはずっと前から「このような思い」がはつきりと存在していて、それゆゑ、その「機会」をずっと「狙つていた」とともに、いつかその日が来ることを夢見ていたのである。そして、ついに「……僕がかねてから夢みていたことが今夜こそ実行出来ると思ひ、その期待で興奮した」となるのである。——ちなみに、夫が、「……去年の秋、書斎のスタンドを蛍光灯に改めたのも、実はいつかはこういう機会が来るであろうことを予想したからなのであつた。蛍光灯にするとラジオに雑音が交じると云つて妻や敏子は当時反対だつたのに、僕は視力が衰えて読書に不便であることを理由に蛍光灯に変えたのだつたが、そんなことよりも、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う欲望に燃えていた」からだつたのである。

二、本文 その二

すべては予期の如くに行つた。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取つて、素つ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフロアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。僕はまずその一点の汚れもない素晴らしい裸身を目の前にした時に暫くは全く度を失つて呆然とさせられていた。僕は自分の妻の裸体を斯様な全身像の形において見たのは始めてだったからだ。多くの「夫」は彼の妻の肉体の形状について、恐らくは巨細にわたつて、足の裏の皺の数までも知り悉していることであろう。ところが僕の妻は今まで僕に決して見せてくれなかった。情事の時に自然部分的にとどころを見たこととはあるけれども、それも上半身の一部に限られていたのであつて、情事に必要のないところは絶対に見せてくれなかった。僕はただ手で触つて見てその形状を想像し、相当素晴らしい肉体の持ち主であるうと考えていたのであつて、それ故にこそ白光の下に曝してみたいと云う念願を抱いた訳であつたが、さてその結果は僕の期待を裏切らなかつたのみならず、むしろ遙かにそれ以上であつた。僕は結婚後始めて、自分の妻の全裸体を、その全身像の姿に於いて見たのである。就中その下半身をほんとうに残り限なく見ることが得たのである。

彼女は明治四十四年生れであるから、今日の成年女子のような西洋人臭い体格ではない。若い頃には水泳とテニスの選手であつたと云うだけに、あの頃の日本女性としては均整の取れた骨格を持つていているけれども、例えば、その胸部は薄く、乳と臀部の発達是不十分で、脚もしなやかに長いには長い、下がややO形に外側へ彎曲しており、遺憾ながら真つ直ぐとは云えにくい。殊に足首のところ十分に細く括れていないのが欠点だけれども、僕はあまりに西洋人臭いすらりとした脚よりも、いくら昔の日本婦人式の脚、私の母だとか叔母だとか云う人の歪んだ脚を思い出させる脚の方が懐しくて好きだ。のつぺらぼうに棒のように真つ直ぐなのは曲が過ぎる。胸部や臀部もあまり発達し過ぎたのよりは中宮寺の本尊のようにほんの微かな盛り上りを見せている程度のが好きだ。妻の体の形状は、恐らくこんな風であろうと大凡そ想像はしていたのだが、果たして想像の通りであつた。しかも僕の想像を絶していたのは全身の皮膚の純正さだつた。大概な人間には体の何処かしらにちよつとした些細な斑点、——薄紫や黝黒等のしみぐらいはあるものだが、妻は体じゆう丹念に捜しても何処にもそんなものはなかつた。僕は彼女を俯向きにさせ、臀部の孔まで覗いて見たが、臀肉が左右に盛り上がっている中間の凹みのところの白さと云つたらなかつた。……四十四歳という年齢に達するまで、その間には女兒を一人分娩しながら、よくもその皮膚に少しの疵もしみも附けず来たものよ。僕は結婚後何十年間も、暗黒の中で手を以て触れることを許されていただけで、この素晴らしい肉体を目で視ることなく今日に至つたが、考えて見ればそれが却つて幸福であつた。二十数年間の同棲の後に、始めて妻の肉体美を知つて驚くことを得る夫は、今から新しい結婚を始めるのと同じだ。すでに倦怠期を通り過ぎていた時期になつて、私は昔に倍加する情熱を以て妻を溺愛することが出来るのである。(本文)

*

*

まず、夫は、なぜこのようなことをしているのかと問えば、それは、多くの「夫」は彼

の妻の肉体の形状について、恐らくは巨細にわたって、足の裏の皺の数までも知り悉くしていることであろう。ところが、「……僕の妻は今まで僕に決して見せてくれなかった。情事の時に自然部分的にところどころを見たことはあるけれども、それも上半身の一部に限られていたのであって、情事に必要のないところは絶対に見せてくれなかった。僕はただ手で触って見てその形状を想像し、相当素晴らしい肉体の持ち主であろうと考えていたのであって、それ故にこそ白光の下に曝してみたいと云う念願を抱いた訳であったが、さてその結果は僕の期待を裏切らなかつたのみならず、むしろ遙かにそれ以上であった。僕は結婚後始めて、自分の妻の全裸体を、その全身像の姿に於いて見たのである。就中その下半身をほんとうに残り隈なく見ることが得たのである」とある。そして、妻の「裸体」の実に事細かな「説明」になっていくが、夫の「好み」は、「……僕はあまりに西洋人臭いすらりとした脚よりも、いくらか昔の日本婦人式の脚、私の母だとか叔母だとか云う人の歪んだ脚を思い出させる脚の方が懐しくて好きだ。のっぺらぼうに棒のように真っ直ぐなのは曲がなさ過ぎる。胸部や臀部もあまり発達し過ぎたのよりは中宮寺の本尊のようにほんの微かな盛り上りを見せている程度のが好きだ」とある。これがそのまま「谷崎潤一郎」の「好み」であつたかどうかはよく分からないが、「……妻の体の形状は、恐らくこんな風である」と大凡そ想像はしていたのだが、果たして想像の通りであつた。しかも僕の想像を絶していたのは全身の皮膚の純正さだつた」とある。それは、「……四十四歳という年齢に達するまで、その間には女兒を一人分娩しながら、よくもその皮膚に少しの疵もしみも附けず来たものよ」と驚き、「……二十数年間の同棲の後に、始めて妻の肉体美を知って驚くことを得る夫は、今から新しい結婚を始めるのと同じだ。すでに倦怠期を通り過ぎていく時期になつて、私は昔に倍加する情熱を以て妻を溺愛することが出来るのである」となるのである。……

三、本文 その三

僕は俯向きに寝ている妻の体をもう一度仰向きに打ち反した。そうして暫く眼を以てその姿態を貪り食ひ、ただ歎息しているばかりであつた。ふと僕は、妻はほんとうに寝ているのではない、たしかに寝たふりをしてるのに違ひないと思われて来た。彼女は最初はほんとうに寝ていたらしいが、途中から眼が覚めたのだ。覚めたけれども事の意外に驚き呆れ、余りに羞かしい格好をしているので、寝たふりをして通そうとしているのだ。僕はそう思った。それは或は事実ではなく、僕の単なる妄想であるかもしれないが、でもその妄想を僕は無理にも信じたかつた。この白い美しい皮膚に包まれた一個の女体が、まるで死骸のように僕の動かすままに動きながら、実は生きて何もかも意識していたのだとすれば、僕にたまらない愉悅を与えた。だが若し彼女がほんとうに睡っていたのだとすれば、僕はこんな悪戯に耽つたことは日記に書かない方がよいのではあるまいか。妻がこの日記帳を盗み読みしていることは殆ど疑いないとして、こんなことを書いたら今後酔うことを止めはしないか。……いや、恐らく止めはしないであろう。止めたなら彼女がこれを盗み読みしていることを証拠立てるようなものであるから、彼女はこれを読みさえしなければ、意識を失っている最中に何をされたか知らない筈なのであるから。

僕は午前三時頃から約一時間以上も妻の裸形を見守りつつ尽きることなく感興に浸って

いた。勿論その間ただ黙って眺めていたばかりではない。僕は、彼女が空寝入りをしているのだとすれば、何処までそれを押し通せるか試してやれと云う気もあった。最後まで空寝入りをせざるを得ない羽目に陥れて困らせてやれと云う気もあった。僕はいつも彼女が厭がっているところの悪戯の数々、——彼女に云わせれば執拗い、恥かしい、いやらしい、オソドックスでないところの痴戯の数々を、この機会であると思つて代る代る試してやった。僕は何とかしてあの素晴らしい脚を、思う存分我が舌を以て愛撫し尽くしたいと云う長い間心に秘めていた念願を、始めて果たすことが出来た。その他あらゆる様々なことを、彼女の常套語を真似れば、ここに書き記すのも寔に恥かしいようないろいろなことをしてみた。一度僕は、彼女が如何なる反応を示すかと思つてあの性慾点を接吻してやったが、誤つて眼鏡を彼女の腹の上に落とした。彼女は明らかにハツとして眼を覚ましたらしく瞬いた。僕も思わずハツとして慌てて蛍光灯を消し、一時室内を暗くした。そしてルミナル錠とカドロノックス半錠とを、ストーブの上に懸かつていた湯沸しの湯に水を割り微温湯を作つて飲みました。僕が口移しにすると、彼女は半ば夢見つつあるかの如き様子で飲んだ。(そのくらの分量を服しても利かない時は利きはない。僕は必ずしも睡らせるのが目的で飲みましたのではない。彼女が睡る真似をするのに都合がよからうと思つて飲みましたのである。(本文)

*

*

さて、夫は、やがて、「……ふと僕は、妻はほんとうに寝ているのではない、たしかに寝たふりをしていのに違ひないと思われて来た。彼女は最初はほんとうに寝ていたらしいが、途中から眼が覚めたのだ。覚めたけれども事の意外に驚き呆れ、余りに羞かしい格好をしているので、寝たふりをして通そうとしているのだ。僕はそう思った。それは或は事實ではなく、僕の単なる妄想であるかも知れないが、でもその妄想を僕は無理にも信じたかつた」とある。その「理由」は、それを逆に悪「利用」して、「……僕は、彼女が空寝入りをしているのだとすれば、何処までそれを押し通せるか試してやれと云う気もあった。最後まで空寝入りをせざるを得ない羽目に陥れて困らせてやれと云う気もあった。僕はいつも彼女が厭がっているところの悪戯の数々、——彼女に云わせれば執拗い、恥かしい、いやらしい、オソドックスでないところの痴戯の数々を、この機会であると思つて代る代る試してやった。僕は何とかしてあの素晴らしい脚を、思う存分我が舌を以て愛撫し尽くしたいと云う長い間心に秘めていた念願を、始めて果たすことが出来た。その他あらゆる様々なことを、彼女の常套語を真似れば、ここに書き記すのも寔に恥かしいようないろいろなことをしてみた」となるのである。

そして、「……一度僕は、彼女が如何なる反応を示すかと思つてあの性慾点を接吻してやったが、誤つて眼鏡を彼女の腹の上に落とした。彼女は明らかにハツとして眼を覚ましたらしく瞬いた。僕も思わずハツとして慌てて蛍光灯を消し、一時室内を暗くした」とある。この「場面」について、妻の「日記」では、次のように記されているのである。つまり、「……私が意識を失っているのをよいことにして私の体をいろいろと弄んだに違ひない。私は彼があまり猛烈に腋の下を吸い続けるので、ハツとして或る一瞬間意識を回復した時があった。その時、彼は掛けていた眼鏡を私の脇腹の上に落としてヒヤリとしたので、とたんに私は眼を覚ましたのだ。——私は体じゅうの衣類を全部きれいに剥ぎ取られ、一糸も纏わぬ姿にされて仰向けに臥かされ、フロアスタンドと、枕元

の螢光燈のスタンドとが青白い圈を描いている中に曝されていた。——そうだ、螢光燈の光があまり明るいので眼が覚めたのかも知れない。——それでも私はただボンヤリしていただけであつたが、夫は私の腹の上に落ちた眼鏡を拾つて掛け、腋の下を止めて下腹部のところ唇を当てて吸い始めた。私は反射的に身をすくめ、慌てて体を隠そうとして毛布を探ったのを覚えていたが、夫も私が眼を覚ましかけたのに気がついて私に羽根布団と毛布を着せ、枕元の螢光燈を消し、フロアスタンドのシェードの上に覆いを被せた」となるのである。その後、夫は、いわば「睡眠剤」を口移しで「妻」に飲ませるのであつた。

四、本文 その四

彼女が睡り込んだ（若しくは睡り込んだ風をした）のを見定めてから、僕は最後の目的を果たす行動を開始した。今夜は僕は、妻に妨げられることなく、すでに十分に予備運動を行い、情慾を掻き立てた後であつたし、異常な興奮にふるい立っていた際であつたから、自分でも驚くほどのことを行う事が出来た。今夜の僕はいつもの意気地のない、いじけた僕ではなくて、相当強力に、彼女の淫乱を征服出来る僕であつた。僕は今後も頻繁に彼女を悪酔いさせるに限ると思つた。ところで彼女は、彼女の方も数回にわたり事を行ったにも拘わらずなお完全には睡りから覚めていないように見えた。なお半睡半醒の状態にあるかの如くであつた。時々彼女は眼を半眼に見開いたが、それはあらぬ方向を見ていた。手もゆつくりと動かしていたが夢遊病者のような動かし方であつた。そして今までにないことには、僕の胸、腕、頬、頸、脚などを手で探るような動作をした。彼女はこれまで決して必要以外の部分を見たり触れたりしたことがなかつたのだ。彼女の口から「木村さん」と云う一言が讒言のように洩れたのはこの時だつた。かすかに、実にかすかに、たった一度だけであつたが、確かに彼女はそう云つた。これはほんとうの讒言だつたのか、讒言の如く見せかけて故意に聞かせたのであるか、このことは今もなお疑問だ。そしていろいろな意味に取れる。彼女は寝惚けて、木村と情交を行っていると思つたのであるか、それともそう見せかけて、「ああ木村さんとこんな風になつたらなあ」と思っている気持を、僕に分からせようとしているのであろうか、それとも又、「私を酔わせて今夜のような悪戯をすれば、私はいつも木村さんと一緒に寝る夢を見ますよ、だからこんな悪戯はおやめなさい」と云う意味であろうか。……

夜八時過木村から電話。「その後奥さんはいかがですか、お見舞いに伺う筈なのですが」と云うので、「あれから又睡眠剤を飲ましたのでまだ寝ている、別に苦しいではないから心配に及ばぬ」と答えた。（本文）

*

*

さて、夫は、「……最後の目的を果たす行動を開始した。今夜は僕は、妻に妨げられることなく、すでに十分に予備運動を行い、情慾を掻き立てた後であつたし、異常な興奮にふるい立っていた際であつたから、自分でも驚くほどのことを行う事が出来た。今夜の僕はいつもの意気地のない、いじけた僕ではなくて、相当強力に、彼女の淫乱を征服出来る僕であつた。僕は今後も頻繁に彼女を悪酔いさせるに限ると思つた」とある。そして、この「場面」で最も「考慮すべき点」は、むしろ「妻の反応」の方である。つまり、妻の方は、「……数回にわたり事を行ったにも拘わらずなお完全には睡りから覚めていないよう

に見えた。なお半睡半醒の状態にあるかの如くであった。時々彼女は眼を半眼に見開いたが、それはあらゆる方向を見ていた。手もゆっくりと動かしていたが夢遊病者のような動かし方であった。そして今までにないことには、僕の胸、腕、頬、頸、脚などを手で探るような動作をした。彼女はこれまで決して必要以外の部分を見たり触れたりしたことがなかったのだ。彼女の口から『木村さん』と云う一言が譫言のように洩れたのはこの時だった。かすかに、実にかすかに、たつた一度だけであったが、確かに彼女はそう云った。これはほんとうの譫言だったのか、譫言の如く見せかけて故意に聞かせたのであるか、このことは今もなお疑問だ」とある。(これは、夫から見た、「妻の反応」である。)

一方、妻の「日記」には、次のように記されている。「……夫が何か睡眠剤のようなものを口移しに飲ましたので、私は半睡半醒の状態に入った。私が、夫ではなくて木村さんを抱いて寝ているような幻覚を見たのはそれからであった。幻覚？ 私が見たのはそんな生やさしいものではない。ほんとうに『抱いて寝ていた』実感が今もなお腕や腿の肌にはツキリ残っているのである。それは夫の肌に触れたのとは全く違う感覚である。私はしかとこの手をもって木村さんの若々しい腕の肉を掴み、その弾力のある胸板に押しつけられた」のである。そして、「……夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えばあんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんとのものだったのだ。木村さんが私にこれを教えてくれたのだ。……私はそう思う一方、それがほんとうは一部分夢であることも分っていた。私を抱擁している男は木村さんのように見えるけれども、それは夢の中でそう感じているので、実はこの男は夫なのだとということ、——夫に抱かれながら、それを木村さんと感じているのだということ、——それも私には分っていたのである」とある。

それでは、妻は、なぜこのような「幻覚？」を見たのだろうか？ その「謎解き」を試してみたいと思うが、それは、次のようなことである。——まず、何か睡眠剤のようなものを口移しに飲まされ、私は「半睡半醒の状態」に入ったことが一つではあるが、もう一つは、まさに「……夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった」のである。それゆえ、(眼を伏せている)、妻の朦朧とした「頭の中」(或いは「心の中」)では、相手が「夫であるはずがない」と思うのである。「夫ではない」とすれば、自然と「木村さん」という想いが生じて来て、「……木村さんであればいいなあ、木村さんであってほしいという願望」から、やがて、「……私は、今、木村さんに抱かれているのだというような想い」へと変化し、現に今、私は、「……木村さんに抱かれているような感じになつてはいる」が、しかし、実際は、「……夫に抱かれながらも、それを木村さんと感じているのだということ」になるのである。——これは、それほど特別なことではなく、例えば、「……夫に抱かれながらも、誰か好きでたまらないような人を頭の中で想い描きながらことを行なえば」、恐らく、その人に抱かれているような「感じ」を味わうことはでき得るのだろう。しかも、妻は、多量の「酒」や「睡眠剤」などを飲んでいたり、一応考慮に入れなければならぬ。それに加えて、「木村さん」という「言葉」も、絶頂に達する寸前に思わず洩れた「言葉」と考えれば、それほど不自然なことではないのである。

て気分が悪くなると、便所へ閉じ籠もる癖があるのだが、あの晩もそうであった」とある。そして、夫（大学教授）は、このことをよく知っていたので、木村は、奥さんがいないと慌てていたが、一方、夫（大学教授）は、むしろ密かにこうなることを期待していたのである。そして、妻（郁子）は、「……私は何十分間ぐらい便所に籠っていたのだろうか。何十分？ いや一時間も二時間もではなかったらうか。私はちっとも苦しくはなかった。苦しいよりは恍惚とした気持だった。意識はぼんやりしていたけれども全然覚えがないわけではなく、ところどころ分っている部分もある」とある。そして、夫（大学教授）は、妻（郁子）が「便所」で倒れているところを、木村と一緒に「寝室」へと運ぶ予定であったのかも知れない。ところが、妻（郁子）は、「……あまり長時間便器に跨って蹲踞っていたので、腰や脚が疲れて、いつの間にか金隠しの前に両手をついてしまい、とうとう頭までべったり板の間についてしまったことも、うる覚えに思い出される。そして私は体じゅうが便所臭くなつた気がして外へ出たのであったが、その臭気を洗い落すつもりだったのか、まだ足もとがふらついているので人に遇うのが嫌だったのか、そのまま風呂場へ行って着物を脱いだのであったらしい」とある。そして、これが、まさに風呂場の「浴槽の中」で倒れていた（本人が語る）「理由」になるのである。

一方、夫（大学教授）にとつては、これは、ある程度、予想できた展開なのか？ それとも、予想外の展開だったのか？ それは、何とも判別しがたいが、とにかく、倒れている妻（郁子）を木村の手を借りて「寝室」へと運ぶという本来の「目的」は、達成できたということである。しかも、全裸で「浴槽の中」にいたとすれば、その「肉体」もそれなりに「きれい」に洗い流されていたということにもなるのだろうか。……

二、本文 その二

気がついた時はすでにベッドの中において、早い朝の日光が寝室を薄明るくしていた。それが昨日の朝方の午前六時頃のことだったらしいのだが、それ以後ずっと意識がハッキリしつづけていたわけではない。私は頭が割れるように痛み、全身がズシンと深く沈下して行くのを感じつつ幾度も眼が覚めたり睡ったりすることを繰り返していた、——いや、完全に覚め切ることも睡り切ることもなく、その中間の状態を昨日一日繰り返していた。頭はガンガン痛かったけれども、その痛さを忘れさせる奇怪な世界を出たり入ったりしつづけていた。あれはたしかに夢に違いないけれども、あんなに鮮やかな、事実らしい夢というものがあるだろうか。私は最初、突然自分が肉体的な鋭い痛苦と悦楽との頂天に達していることに心づき、夫にしては珍しく力強い充実感を感じさせると不思議に思っていたのだったが、間もなく私の上にいるのは夫ではなくて木村さんであることが分った。それでは私を介抱するために木村さんはここに泊っていたのだろうか。夫はどこへ行ったのだろうか。私はこんな道ならぬことをしてよいのだろうか。……しかし、私にそんなことを考える余裕を許さないほどその快感は素晴らしいものだった。夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えばあんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんとのものだったのだ。木村さんが私にこれを教えてくれたのだ。……

私はそう思う一方、それがほんとうは一部分夢であることも分っていた。私を抱擁している男は木村さんのように見えるけれども、それは夢の中でそう感じているので、実はこの男は夫なのだということ、——夫に抱かれながら、それを木村さんと感じているのだということ、——それも私には分っていた。(本文)

*

*

さて、ここで最も大事な「文章」は、次の「文章」であるが、それは、次のような理由からである。つまり、「……夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えば、あんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんものものだったのだ」という部分である。——そして、これこそは、夫(大学教授)の全く知らない、まさに妻(郁子)の「本心」そのものが露骨に表現されているところなのである。つまり、妻(郁子)という女性にしてみれば、「……夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は今までにただの一度もこれほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えば、あんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんものものだったのだ」という事であり、妻(郁子)という女性にしてみれば、生まれて初めて、まさに「これほどの深い快感を味わった」ということである。

三、本文 その三

たぶん、夫は、一昨日私を風呂場からここへ運び込んで寝かしつけておいてから、私が意識を失っているのをよいことにして私の体をいろいろと弄(もよほ)んだに違いない。私は彼があまり猛烈に腋(わき)の下を吸い続けるので、ハッとして或る一瞬間意識を回復した時があった。その時、彼は掛けていた眼鏡を私の脇腹(わきばら)の上に落としてヒヤリとしたので、とたんに私は眼を覚ましたのだった。——私は体じゅうの衣類を全部キレイに剥(は)ぎ取られ、一糸も纏(まと)わぬ姿にされて仰向けに臥(ね)かされ、フロアスタンドと、枕元の蛍光灯のスタンドとが青白い圈(けん)を描いている中に曝(さら)されていた。——そうだ、蛍光灯の光があまり明るいので眼が覚めたのかも知れない。——それでも私はただボンヤリしていただけであつたが、夫は私の腹の上に落ちた眼鏡を拾って掛け、腋(わき)の下を止めて下腹部のところに唇を当てて吸い始めた。私は反射的に身をすくめ、慌(わ)てて体を隠(かく)そうとして毛布を探(たづ)めたのを覚えているが、夫も私が眼を覚ましかけたのに気がついて私に羽根布団(はねぶとん)と毛布を着せ、枕元の蛍光灯を消し、フロアスタンドのシェードの上に覆(おほ)いを被(か)せた。(本文)

*

*

さて、夫(大学教授)は、妻(郁子)が睡(ねむ)っている間、「……僕はいつも彼女が厭(いや)がっているところの悪戯(いたずら)の数々、——彼女に云わせれば執拗(しつこ)い、恥かしい、いやらしい、オーソドックスでないところの痴戯(ちぎ)の数々を、この機会であると思つて代る代る試してやつた。……僕は何とかしてあの素晴らしい美しい脚を、思う存分我が舌を以て愛撫(あいぶ)し尽くしたいと云う長い間心に秘(ひ)めていた念願を、始めて果たすことが出来た。その他あらゆる様々なことを、彼女の常套語(じょうたうご)を真似(まね)れば、ここに書き記すのも寔(まこと)に恥かしいいろいろな

ことをしてみた。一度僕は、彼女が如何なる反応を示すかと思つてあの性慾点を接吻してやつたが、誤つて眼鏡を彼女の腹の上に落とすした。彼女はその時は明らかにハツとして眼を覚ましたらしく瞬いた。僕も思わずハツとして慌てて蛍光灯を消し、一時室内を暗くした。そしてルミナール一錠とカドロノックス半錠とを、ストープの上に懸かつていた湯沸しの湯に水を割り微温湯を作つて飲みました。僕が口移しにすると、彼女は半ば夢見つつかあるかの如き様子で飲んだ」となるのである。

四、本文 その四

さて、夫は、書齋のデスクの上にあつた螢光灯を持つて来ては、螢光灯の光の下で、私の体のデテイルを仔細に点検することに限りない愉悅を味わつたのであろうと思つと、——私は私自身でさえそんなに細かく見たことのない部分々々を夫に見られたのかと思つと、顔が赧くなるのを覚える。夫はよほど長時間私を裸体にしておいたのに違いなく、その証拠には、私に風邪を引かせまいために、——そうしてまた眼を覚まさせまいために、——ストープを真赤に燃やして部屋を異常に燠めてあつた。私は夫に弄ばれたことを、今になつて考えると腹立たしくも恥かしく感じるけれども、その時はそんなことよりも頭がガンガン疼くのに堪えられなかつた。

夫が、——何か睡眠剤だつたのだろう、——水と一緒に嚙み砕いたものを口移しに飲ましたが、頭の痛みを忘れたいたので私は素直にそれを飲んだ。と、間もなく私はまた意識を失いかげ、半睡半醒の状態に入つたのだつた。私が、夫ではなくて木村さんを抱いて寝ているような幻覚を見たのはそれからであつた。幻覚？ という、何かぼうつと今にも消えてなくなりそうに空に浮かんでいるもののようにだけれども、私が見たのはそんな生やさしいものではない。私は「抱いて寝ているような幻覚」と云つたが、「ような」ではなく、ほんとうに「抱いて寝ていた」実感が今もなお腕や腿の肌ハッキリ残っているのである。それは夫の肌に触れたのとは全く違う感覚である。私はシカとこの手をもつて木村さんの若々しい腕の肉を掴み、その弾力のある胸板に押しつけられた。何よりも木村さんの皮膚は非常に色白で、日本人の皮膚ではないような気がした。それに、……あゝ、恥かしいことだが、……よもや夫はこの日記の存在を知るはずはないし、まして内容を読むわけはないと思つたので書くのだけれども、……あゝ、夫がこの程度であつてくれたら、……夫はどうしてこういう工合に行かないのだろう。……実に奇妙なことなのだが、私はそう思いながらそれが夢であることも、……夢といつても、一部分が現実で、一部分が夢であることを、……といふのは、ほんとうは夫に犯されているのであつて、夫が木村さんのように見えているのであるらしいことも、意識のどこかで感じていた。ただそれにしてはおかしいのは、あの内容の充実感だけが、……夫のものとは思われぬ圧覚だけが、依然として感じられているのであつた。(本文)

*

*

さて、妻(郁子)は、夫から「睡眠剤」を口移しに飲まされてから、「……間もなく私はまた意識を失いかげ、半睡半醒の状態に入つたのだつた。私が、夫ではなくて木村さんを抱いて寝ているような幻覚を見たのはそれからであつた。幻覚？ という、何かぼうつと今にも消えてなくなりそうに空に浮かんでいるもののようにだけれども、私が見たのは

そんな生やさしいものではない。私は『抱いて寝ているような幻覚』と云ったが、『ような』ではなく、ほんとうに『抱いて寝ていた』実感が今もなお腕や腿の肌にハッキリ残っているのである。それは夫の肌に触れたのとは全く違う感覚である。私はシカとこの手をもつて木村さんの若々しい腕の肉を掴み、その弾力のある胸板に押しつけられた。何よりも木村さんの皮膚は非常に色白で、日本人の皮膚ではないような気がした」とある。

これは、多量の「酒」と「睡眠剤」などでまさに朦朧とした半睡半醒の状態に深く入ったところで、夫は、「……最後の目的を果たす行動を開始した。今夜の僕は、妻に妨げられることなく、すでに十分に予備運動を行い、情慾を掻き立てた後であったし、異常な興奮にふるい立っていた際であったから、自分でも驚くほどのことを行う事が出来た。今夜の僕はいつもの意気地のない、いじけた僕ではなくて、相当強力に、彼女の淫乱を征服出来る僕であった」とある。それを妻（郁子）から見ると、「……あゝ、夫がこの程度であつてくれたら、……夫はどうしてこういう工合に行かないのだろう。……実に奇妙なことなのだ、私はそう思いながらそれが夢であることも、……夢といつても、一部分が現実で、一部分が夢であることを、……というのは、ほんとうは夫に犯されているのであつて、夫が木村さんのように見えているのであるらしいことも、意識のどこかで感じていた。ただそれにはおかしなのは、あの内容の充実感だけが、……夫のものとは思われない。幻覚だけが、依然として感じられているのであつた」とある。——つまり、多量の「酒」と「睡眠剤」などでまさに朦朧とした半睡半醒の状態に深く陥っていたところに、あの「内容の充実感」（それは今までの夫の性交とは全く違う、圧覚だった）ので、夫であるはずはなく、だとすれば、木村さんに違いないという「幻覚」へと、まさに「彼女の願望」も加味されて、木村さんであつて欲しいということから、そのような「幻覚」になつたのであるが、もちろん、一方には、夫に抱かれているという意識もちゃんとあるのである。

五、本文 その五

もしあのクルボアジェのお蔭であのように酔うことができるのであつたら、そしてそのような幻覚を感じることができるのであつたら、私は何度でもあのブランドーを飲ましてほしい。私は私にああいう酔いを教えてくれた夫に感謝しなければならぬ。だがそれにして、私が幻覚で見たものは、果して実際の木村さんなのであろうか。私は現実には木村さんの容貌と衣服を通しての姿態を知っているだけで、まだ一遍もハダカを見たことはないのに、どうしてそれが幻覚になつて出て来たのであろうか。あれは私の空想している木村さんであつて、現実の木村さんとは違ふのであろうか。一度私は、夢や幻覚でなく、実際に木村さんのハダカの姿を見てみたい気がする。（本文）

*

*

さて、この日の妻（郁子）の「日記」は、極めて大事なものであり、それは、妻（郁子）の「本心」そのものが、露骨なほどにはつきりと明記されているからである。——それは、つまり、「……夫は今までにただの一度も、これほどの快感を与えてくれたことはなかった。夫婦生活を始めてから二十何年間、夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えばあんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんとのものだったのだ。木村

さんが私にこれを教えてくれたのだ」とある。——つまり、妻は、この二十何年間、夫との「性交」そのものから得られる「快感」にははつきりと強い「不満」を持っていたのであり、だからこそ、妻（郁子）は、まさに「……夫は何とつまらない、およそこれとは似ても似つかない、生ぬるい、煮えきらない、後味の悪いものを私に味あわせていたことだろう。今にして思えばあんなものは真の性交ではなかったのだ。これがほんとのものだったのだ」と云うのである。そして、夫の行なっている実に様々な「痴戯」などはみな取るに足らないものであり、それよりも、むしろ「性交」そのもので自分を真に深く満足させてほしかつたのである。そして、今や妻は、今までの「性交の快感」などではとても満足できず、今回のこの「性交の快感」でなければ、もう「満足できない女」になつてしまつたのである。だからこそ、妻は云うのである。つまり、「……もしあのクルボアジェのお蔭かげであるように酔うことができるのであつたら、そしてあのような幻覚を感じる事ができるであつたら、私は何度でもあのブランドーを飲ましてほしい。私は私にああいう酔いを教えてくれた夫に感謝しなければならぬ」と。つまり、今までに「ただの一度も味わつたことのない、これほどの快感」に、妻ははつきりと「愛着」を持つようになったのである。そして、その後、妻は、何度もこの同じ「陶醉」（パターン）を繰り返すことになるのである。

十二、夫の日記 一月三十日（月）

一月三十日。……正午過ぎ、木村から学校へ電話「御容態はいかがですか」と云うから、「今朝、僕が出かける時までには寝ていたが、もう何でもなさそうだ。今夜また飲みに来てくれたまえ」と云つたら、「飛んでもない、一昨夜晩はびっくりしました。少し先生も慎んで下さい。とにかくお見舞いに参ります」と云つていたが、午後四時に来た。妻ももう起きて茶の間にいた。木村は「もう直ぐ失礼します」と云つたが、「今夜は是非飲み直そうよ」と、僕は強く引き止めた。妻も傍そばでそれを聞きながらニヤニヤしていた。木村も口ではそう云ながらその実腰を上げる様子はなかった。木村は、一昨日の深夜、彼が辞去した後に我々の寝室に於いて如何なる事件が起こつたか知る筈はないのだが、そして又、まさか自分が郁子の幻影の世界に現われ、彼女を陶醉せしめたことを知っている筈もないのだが、にも拘かわらず、内心郁子を酔わせたがっているかの如き様子が見えるのは何故であろうか。木村は、郁子が何を欲しているかを知っているかの如くである。知っているはずれば、それは以心伝心であろうが、或は郁子から暗示されたのであろうか。ただ敏子だけは、三人で酒が始まると必ず嫌な顔をして自分だけさっさと切り上げて出て行ってしまう。今夜も妻は中座して便所に隠れ、それから風呂場（風呂は一日置きなのだが、当分毎日沸かすことにすると妻は婆やに話していた。婆やを通いなので夕方水だけ張っておいて帰り、瓦斯ガスに火を付けるのは我々のうちの誰かなのだが、今夜八時時分を見計らつて郁子が付け）へ行つて倒れた。すべて一昨日の通りであつた。児玉氏が来てカンフルを射し、敏子が逃げたのも、木村が適当に介護して辞去したのも先夜と同じ。その後の僕の行動も同じ。そして最も奇怪なのは、妻のあの讒言うわごとも同じ。……「木村さん」と云う一言が今夜も彼女の口から漏れた。彼女は今夜も同じ夢、同じ幻覚を、同じ状況の下に於いて見た？……僕は彼女に愚弄おろそされていると解するべきなのであろうか。（本文）

*

*

さて、正午過ぎに、木村から学校へ「御容態はいかがですか」という電話があり、「今朝、僕が出かける時までは寝ていたが、もう何でもなさそうだ。今夜また飲みに来てくれたまえ」と云うと、「……飛んでもない、少し先生も慎んで下さい。とにかくお見舞いに参ります」ということで、午後四時に来た。妻ももう起きて茶の間にいた。木村は「もう直ぐ失礼します」と云ったが、「今夜は是非飲み直そうよ」と、僕は強く引き止めた。妻も傍でそれを聞きながらニヤニヤしていた。木村も口ではそう云ながらその実腰を上げる様子はなかった」とある。——これは、一体、何を意味するかと問えば、それは、三人が三人ともこの前の「風呂場事件」のような出来事を切に望んでいるということである。まず、夫は、「……今夜の僕はいつもの意気地のない、いじけた僕ではなくて、相当強力に、彼女の淫乱を征服出来る僕であった。僕は今後も頻繁に彼女を悪酔いさせるに限ると思った」ということであり、また、妻は、「……もしあのクルボアジェのお蔭であのように酔うことが出来るのであったら、そしてあのような幻覚を感じることが出来るのであったら、私に何度でもあのブランドを飲ましてほしい」ということであり、そして、木村には、これという「生の言葉」はないが、当然のことながら、妻（郁子）の「裸体」を見たり触ることが出来るのであれば、敢えて断る理由もないのである。そして、夫は、「……木村は、一昨日の深夜、彼が辞去した後に我々の寝室に於いて如何なる事件が起こったか知る筈はないのだが、そして又、まさか自分が郁子の幻影の世界に現われ、彼女を陶酔せしめたことを知っている筈もないのだが、にも拘わらず、内心郁子を酔わせたがっているかの如き様子が見えるのは何故であろうか。木村は、郁子が何を欲しているかを知っているかの如くである。知っているとするれば、それは以心伝心であろうが、或は郁子から暗示されたのであろうか」とある。これは、後述の妻の「日記」の中では、あの夜の「様子」というのは、木村は、敏子から何らかの「話」を聞いていたのだらうとなっているのである。

そして、「……すべて一昨日の通り」が起きて、「木村さん」と云う一言が今夜も彼女の口から漏れたとある。この「木村さん」という言葉は、最初の時だけが、いわば「自然発生的なもの」であったと思うが、（本人は最初も含めて）、それ以後は、すべて妻のまさに「意図的な言葉」であったとなるのである。というのも、妻の後述の「日記」の中でも、「……あの譚話には、『木村さんとこんな風になつたらなあ』という気持と、『夫があの人を私に世話してくれたらなあ』という気持と、二つの願望が籠っていたに違いない、それを分つて貰うためにあの言葉を云った」とあるからである。そして、夫の「……僕は彼女に愚弄されていると解するべきなのであろうか」という問いに対しても、妻の「日記」の中では、まさに「……あるいはそう解するのが当たっているかも知れない」と記しているのである。——ところで、「……ただ敏子だけは、三人で酒が始まると必ず嫌な顔をして自分だけさっさと切り上げて出て行ってしまふ」という記述がある。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、今の「段階」では、この「三人」にはとても「ついて行かない」ということなのか？ それともほかの理由が別にあるのだろうか？ 例えば、実は木村さんが好きであり、それゆえ、母親と木村さんが仲良く酒を飲み交わしている姿など見たくもないということなのか？ その他、……やがて、敏子は、別居を申し出るようになるのである。

二月九日。今日敏子が別居させてくれと申し出た。理由は静かに勉強したいからであると云い、幸い別居するに都合な家があるので急にその気になったのだと云う。それは同志社で彼女がフランス語を教えて貰っていたフランスの老夫人の家で、今も敏子はその老夫人に個人教授を受けているのである。夫人の夫は日本人であるが、目下中風で臥床しており、夫人だけが同志社に教鞭を執ったり個人教授をしたりして夫を養っているのであるが、夫が発病して以来自宅では敏子以外に生徒を取らず、もっぱら出教授を主にしている。家は夫婦二人きりで、間数は廣くないけれども、夫が書斎に使っていた離れ座敷の八畳が今は不用に帰しているから、そこに寝泊りして下されば夫人も病人の夫を置いて外出するのに安心である。電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある。敏子が借りてくれれば願ってもない仕合せであると夫人の方から話があったという。

そういう条件で、部屋代も安くするそうだから、しばらくそうさしてほしいと云うのである。が、このところほとんど三日置きぐらいに木村さんが来てブランデーが始まり、クルボアジェはすでに二本目が空になり、そのたびごとに私が風呂場で倒れるので、敏子も愛憎が尽きたのであろう。深夜両親の寝室で時々煌々と電燈が点ったり、螢光燈ランプが輝いたりするのも、彼女は気がついて不思議に感じているに違いない。ただし全くそれだけが理由であるのか、他にも私たちに秘している理由があつて別居を欲しているのであるか、そのところは何とも云えない。「パパが何とおっしゃるかあなたが直接聞いてごらん。パパがよいとおっしゃれば私は反対しません」と答えた。（本文）

*

*

さて、ここから「敏子」の様子が少しずつ見えて来ることになるかと思うが、それは、まず、「……今日敏子が別居させてくれと申し出た。理由は静かに勉強したいからである」と云い、幸い別居するに都合な家があるので急にその気になったのだと云う。それは同志社で彼女がフランス語を教えて貰っていたフランスの老夫人の家で、今も敏子はその老夫人に個人教授を受けているのである。夫人の夫は日本人であるが、目下中風で臥床しており、夫人だけが同志社に教鞭を執ったり個人教授をしたりして夫を養っているのであるが、夫が発病して以来自宅では敏子以外に生徒を取らず、もっぱら出教授を主にしている。家は夫婦二人きりで、間数は廣くないけれども、夫が書斎に使っていた離れ座敷の八畳が今は不用に帰しているから、そこに寝泊りして下されば夫人も病人の夫を置いて外出するのに安心である。電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある。敏子が借りてくれれば願ってもない仕合せであると夫人の方から話があり、そういう条件で、部屋代も安くするそうだから、しばらくそうさしてほしいと云うのであった」とある。

まず、夫と妻と敏子の三人「家族」は、京都に住んでいるのであり、そして、二十五歳の「娘」（敏子）は、京都の「同志社大学」でフランス語などを学び、今もその時のフランス人の女教授（夫人）からフランス語を教えてもらっているという設定になっている。そして、彼女の「別居」の理由としては、まさに「静かに勉強したいからである」とある。というのも、「……このところほとんど三日置きぐらいに木村さんが来てブランデーが始まり、クルボアジェはすでに二本目が空になり、そのたびごとに私が風呂場で倒れるので、敏子も愛憎が尽きたのであろう。深夜両親の寝室で時々煌々と電燈が点ったり、

螢光燈ランプが輝いたりするの、彼女は気がついて不思議に感じているに違いない。ただし全くそれだけが理由であるのか、他にも私たちに秘している理由があつて別居を欲しているのであるか、そのところは何とも云えない」とある。

ところで、娘（敏子）は、大学生なのか？ それとも、二十五歳という年齢からすれば、大学院生なのか？ それとも、大学を卒業してからは、今はどこにも就職せず、家でフランス語などの勉強をしているという設定なのか？ 何とも判別し難いが、とにかく、どれかであることは、間違いないことである。そして、別居する「家」は、「……夫が書齋に使つていた離れ座敷の八畳であり、電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある」となっている。それでは、なぜ、「……離れ座敷で、しかも、電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある」という「設定」になつてゐるのだろうか？ それは、後日、この「離れ座敷」で、同じように妻（郁子）が酒に酔つて「風呂場」で倒れるという「事件」が起こることになるが、そのためには、まさに「……離れ座敷で、しかも、電話もあるし、瓦斯風呂の設備もある」というのがいわば「理想的」であり、例えば、若しも「瓦斯風呂の設備」がないとすれば、そもそも「風呂場で倒れる」という事件そのものが起こりようもないことになる。そして、娘（敏子）は、このことをはつきりと意識して、「別居」を始めたのかどうかという問題が生じるかと思うが、恐らく、このことも考慮に入れて部屋を借りてゐるのだろう。逆に言えば、この「瓦斯風呂の設備」がなければ、ここへは「別居」しなかつたかも知れないのである。しかも、この「別居」は、「敏子」一人だけで考えたことなのか？ それとも「木村」と相談をして、この家に「別居」することにしたのか？ その他、まだいろいろな「謎」が残されているのである。……

十四、夫の日記 二月十四日（月）

二月十四日。……木村が今日妻が台所へ立つて行つた留守に妙な話をした。「アメリカにポラロイドと云う写真機があるのを御存知ですか」と云うのだった。その写真機は写したものが即座に現像されて出て来る。——操作は極めて簡単で、普通の写真機と変わりがなく、携帯にも便利であり、ストロボのフラッシュを用いれば、露出時間も長きを要しないから、三脚を使わないで写せる。目下のところ、容易に日本では手に入らず、一々アメリカから取り寄せるのである。ところで木村の友人にその機械とフィルムを持っている人があるのだが、「お入り用なら借りて来てもよろしゅうございます」と云うのだった。そう云われて僕は直ちに一つの着想を思いついたが、僕にそう云う機械のあることを教えたら僕が喜ぶであろうと云うことを、どうして木村は察したのであるか、それが不思議だ。彼はよくよく我々夫婦の間の秘密を知つてゐるものと思わなければならない。（本文）

*

*

さて、ここに「ポラロイドという写真機」が出て来る。今日のわれわれであれば、それがどのような「写真機」であるかは、よく知つてはいるが、当時は、まだ「出始め」（昭和三十一年）頃であり、それゆえ、「……容易に日本では手に入らず、一々アメリカから取り寄せるのである」と記している。そして、夫は、「……僕にそう云う機械のあることを教えたら僕が喜ぶであろうと云うことを、どうして木村は察したのであるか、それが不思議だ。彼はよくよく我々夫婦の間の秘密を知つてゐるものと思わなければならない」

とある。これは、恐らく、「敏子」が木村さんに「情報」を提供していることになるのだらう。そして、夫は、すぐに「……一つの着想を思いついた」とあるが、それは、もちろん、妻（郁子）の「全裸写真」を思う存分写し出すことであつたのである。

一五、妻の日記 二月十六日（水）

二月十六日。先刻、午後四時頃、ちよつと気になる出来事があつた。私は日記帳を茶の間の押入の用筆筒の抽出の、臍の緒書だの父母の古手紙だの重ねてある一番下に突っ込んでおいて、なるべく夫の外出の隙を狙って書くようにしているのだが、忘れないうちに書いておきたいこともあるし、急に書きたい衝動に駆られることもあるので、夫の外出を待つていられず、彼が書斎に閉じ籠っている時にも書く。書斎はこの茶の間の真上にあるので、音は聞えて来ないけれども、夫が今何をしつつあるか、書見をしているか、書き物をしているか、彼は彼で日記をつけているか、それともボンヤリ考えごとをしているか等々のことは、おおよそ私に察知できるような気がするのだが、それは恐らく夫の方も同様であろう。書斎はいつもシーンとして静かなのだけれども、しかし時々、夫が俄然息を詰めて階下の茶の間に注意を凝らし始めたらしく思われる、或る特別にシーンとしてしまうような気がする瞬間があるのである。

私が二階を意識しながら密かに日記帳を取り出して筆を執りつつある時に、ややもするとそういう瞬間が訪れるのであるが、私は音を立てないようにするために、西洋紙にペン字で書くことを避け、柔かい薄い雁皮紙を袋綴じにした小型の和装の帳面を作り、それへ毛筆の細字でしたためているのである。さっき私は書く方に興が乗り過ぎて、ほんの一二秒の間二階への注意を怠ってしまった。その時、故意か偶然か、夫が音もなく便所へ下りて来て、茶の間の前を素通りして、用を済ますとまたすぐ二階へ上つて行つた。つまり、私は夫が階段を下り切つた時に始めて足音に気づいたのである。私は食卓に靠れて書いていたのだが、慌てて日記帳と矢立（硯を用いず、父の遺品の矢立を用いている）を卓の下に隠したので、現場は見られないで済んだが、帳面を慌てて隠す時に雁皮の紙を揉みくしゃにしたので、その音を聞いたかも知れない。そして、あの音を聞けば雁皮を想像するに違いないし、そうすればそれを私が何の目的で使っているかを、推知したのではあるまいかと思う。私は今後用心しなければいけないが、夫に日記帳の存在を嗅ぎつかれたとすれば、どうしたらよいか。今さら隠し場所を変えたところで、この狭い室内のどこへ隠しても発見されずに済むはずはない。唯一の方法は、夫の在宅中は私も努めて家を空けないようにすることである。実は木村さんに、朝日会館で「赤と黒」を上映しているのを見に行きませんかと、この間から誘われているのである。行きたいことは行きたいが、何かそれまでに対抗策を考えておく必要がある。（本文）

*

*

さて、妻の「日記帳」の所在であるが、それは、一体、どこに隠してあるのかと問えば、それは、まさに「……私は日記帳を茶の間の押入の用筆筒の抽出の、臍の緒書だの父母の古手紙だの重ねてある一番下に突っ込んでおいて、なるべく夫の外出の隙を狙って書くようにしているのだが、忘れないうちに書いておきたいこともあるし、急に書きたい衝動に駆られることもあるので、夫の外出を待つていられず、彼が書斎に閉じ籠っている時に

も書く」とある。――まず、その「隠し場所」であるが、この「隠し場所」(つまり「押入の用筆筒の抽出の一番下に突っ込んである」というのは、夫にとって極めて「見つけ難い場所」かと問えば、むしろ、比較的「見つけ易い場所」ではないかと思うが、それは、当然のことながら、夫に「見つかからない場所」に自分の日記帳を隠したのでは、何の意味もないのであり、むしろ、自分の「日記の内容」を読んでもらいたいがために、わざわざ妻(郁子)は「日記」を書いているのである。

ところで、先刻、午後四時頃、ちょっと気になる出来事があった。それは、「……私が二階を意識しながら密かに日記帳を取り出して筆を執りつつある時に、さつきは私は書く方に興が乗り過ぎて、ほんの一二秒の間二階への注意を怠ってしまった。その時、故意か偶然か、夫が音もなく便所へ下りて来て、茶の間の前を素通りして、用を済ますとまたすぐ二階へ上って行った。つまり、私は夫が階段を下り切った時に始めて足音に気づいたのである。私は食卓に靠れて書いていたが、慌てて日記帳と矢立を卓の下に隠したので、見られることはなかったが、その時に、その日記帳の『紙の音』を聞かれたかも知れない。そして、あの音を聞けば雁皮を想像するに違いないし、そうすれば、私が日記をつけていることも推察するだろう。私は今後用心しなければならぬが、夫に日記帳の存在を知られたとすれば、どうしたらよいか。今さら隠し場所を変えたところで、どうなるものでもない。実は木村さんに映画『赤と黒』を見に行きませんかと誘われているが、何かそれまでに対抗策を考えておく必要がある」と記している。……そこで、妻(郁子)は、やがて、自分の「日記帳」の表紙の或る一箇所を選んで、表と裏とをテープで封じるということをふと思いついて、それを実行するが、それは、いわば夫向けの「パフォーマンス」であり、いかにも隠そう隠そうとして逆に読ませるといふ「仕掛け」になっているのである。

一六、夫の日記 二月十八日(金)

二月十八日。……昨夜で僕は、妻の「木村さん」という語を耳にすることが四回に及んだ。もはやあの謔言は、謔言を装っていることは疑う余地がなくなつた。とすると、何の目的で左様なことをするのだろうか。「私はほんとうは睡っているのではない、睡った振りをしているのですよ」と云うことを分からせるためとしても、それは、「私はせめて相手をあなたと思いたくないのです、木村さんだと思いたいのです、そうしなければ感興が湧いて来ないのだから、結局はそれがあなたのためでもあります」と云う意味なのか、それとも、「これもあなたを嫉妬させて刺激を与える手段なのです。私はどんな場合でも常に夫に忠実なる妻である以外の何者でもありません」という意味なのか。……

敏子が今日いよいよ別居を執行して、マダム岡田の家に引き移つた。風呂場と離れ屋とを廊下でつなぎ、ピアノだけは運搬の都合で二三日後れるが、他の荷物は木村が手伝いに来て大体運んだ。場所は、田中関田町であるから、ここから歩いて五六分の所だ。木村が間借りしているのも百万遍の近所で田中門前町であるから、この方は関田町に一層近い。木村は手伝いに来たついでに、二階の自分の書斎へと這入つて来ては、「お約束の品を持って来ました」とポラロイドを置いて行つた。(全文)

*

*

まず最初に、すでに四回に及ぶ、妻の「木村さん」という「言葉」の夫の解釈であるが、

それは、「……私はせめて相手をあなたと想いたくないのです、木村さんだと思いたいのです、もしなければ感興が湧いて来ないのだから、結局はそれがあなたのためでもあります」という意味なのか、それとも、「……これもあなたを嫉妬させて刺激を与え手段なのです。私はどんな場合でも常に夫に忠実なる妻である以外の何者でもありません」という意味なのか、とあるが、もちろん、その両方の「意味合い」を含んでいるかと思うが、しかし、大事なことは、最初は、妻（郁子）にしてみても、まさに漠然とした「讒言のようなもの」であつたに過ぎなかつたものが、しかし、今は、それがだんだんと確かな「木村さん」へと変化して来ているのであり、それをもつと言えば、一度でも、ほんとうに「木村さん」に抱かれてみたいというような「願望」へと変わりつつあるのである。

次に、娘（敏子）の「別居」の件であるが、木村は、その「引越し」の時に手伝いに来ている。むろん、両親は、木村を娘（敏子）と結び付けようとしているのであるから、当然のことではあるが、娘（敏子）は、両親の前では、例えば、母親に遠慮をして、木村には連れな素振りを見せてはいるが、意外と、二人でいる時には「仲がいい」のかも知れない。そして、その「別居」の場所であるが、それは、田中関田町であり、木村の「間借りの場所」からも近いというのも気になる場所である。そして、木村は手伝いに来たついでに、二階の自分の書斎へと這入つて来ては、ポラロイドを置いて行くのであつた。……それは、一つは、夫（教授）に取り入るためでもあり、もう一つは、結局は、木村も、妻（郁子）の「全裸写真」を見てみたいからである。

一七、妻の日記 二月十九日（土）

二月十九日。……敏子の心理状態が私には掴めない。彼女は母を愛しているようでもあり憎んでいるようでもある。だが少くとも、彼女が父を憎んでいることは間違いない。彼女は父母の閨房関係を誤解し、生来淫蕩な体質の持主であるのは父であつて、母ではないと思つてゐるらしい。母は生れつき繊弱なたちで過度の房事には堪えられないのに、父が無理やりに云うことを聴かせ、常軌を逸した、よほど不思議な、アクドイ遊戯に耽るので、心にもなく母はそれに引きずられているのだと思つてゐるらしい。（ほんとうを云うと、私が彼女にそう思わせるように仕向けたのである）。昨日彼女は最後の荷物を取りに来て寝室へ挨拶に見えた時に、「ママはパパに殺されるわよ」とたつた一言警告を發して行つた。私同様沈黙主義の彼女にしては珍しいことだ。彼女は私の胸部疾患が、こんなことから悪化して本物になりはしないかを、ひそかに心配してゐるらしくもあるが、そして、それゆえに父を憎んでいるらしいのだが、でもその警告の云い方が妙に私には意地の悪い、毒と嘲りを含んだ語のように聞えた。娘の身として母を案じる暖かい気持から云つていられるには受け取れなかつた。彼女の心の奥底には、自分の方が母より二十年も若いにかかわらず、容貌姿態の点において自分が母に劣つてゐるというコンプレックスがあるのではないか。彼女は最初から木村さんは嫌いだと云つていたが、母——ジェームス・スチュアート——木村さん——という風に気を廻して、ことさら彼を嫌つてゐるらしく装つてゐるが、本心は反対なのではないか。そして内々私に敵意を抱きつつあるのではないか。

私はできるだけ家を空けないことにしているけれども、いっどんな事情で外出の必要に迫られることがあるかも知れず、そこで、私は、夫が内証で私の日記帳に眼を通したかど

うかを、知るだけは知りたい。私は何か日記帳に目印をつけておく。夫が内証で中を覗いたか否かは目印を見れば分るようにしておく。その目印は私にだけ分って、彼には分らないようなものであれば一層よい。——私はいろいろ考えて、試みにセロファンテープを適當の長さ（測ってみたら五センチミリあった）に切り、帳面の表紙の或る一箇所を選んで、表と裏とをそのテープで封じてみた。こうすると、中を読むためにはテープを一度剥がさなければならぬ。一度剥がして、また新しいテープを同じ長さに切り、同じ位置に正確に貼っておくという事は、理論上は可能でも実際にはとても面倒で煩瑣でできるものではない。それにテープを剥がし取る時に、どんなに注意深くしても周囲の表紙の表面に擦過した痕を残すことになる。テープを剥がすと、それと一緒に周囲の表面がところどころ二三ミリぐらい剥ぎ取られて行く。この方法を用いると、夫は絶対に、痕跡を残すことなく内容を読むことはできないことになるのだ。（本文）

*

*

さて、今度は、「……敏子の心理状態が私には掴めない」とある。「……彼女は母を愛しているようでもあり憎んでいるようでもある。だが少くとも、彼女が父を憎んでいることは間違いない」とある。その理由として、「……彼女は父母の閨房関係を誤解し、生来淫蕩な体質の持主であるのは父であつて、母ではないと思つてゐるらしい。母は生れつき繊弱なたちで過度の房事には堪えられないのに、父が無理やりに云うことを聴かせ、常軌を逸した、よほど不思議な、アクドイ遊戯に耽るので、心にもなく母はそれに引きずられてゐるのだと思つてゐるらしい」とある。しかし、「……ほんとうを云うと、私が彼女にそう思わせるように仕向けたのである」ともある。そして、「……昨日彼女は最後の荷物を取りに来て寝室へ挨拶に見えた時に、『ママはパパに殺されるわよ』とたった一言警告を發して行つた。私同様沈黙主義の彼女にしては珍しいことだ。彼女は私の胸部疾患をひそかに心配しているらしくもあるが、それゆえ、父を憎んでいるらしいのだが、でもその警告の云い方が妙に私には意地の悪い、毒と嘲りを含んだ語のように聞えた。娘の身として母を案じる暖かい気持から云つてゐるようには受け取れなかつた」とある。

まず、娘である「敏子」が、「……父親を憎んでいることは間違いない」とある。その理由として、「……父親が母親に過度の房事を無理やり強いているからであり、それゆえ、「……ママはパパに殺されるわよ」と一言警告を發するのである。そして、もう一つの理由としては、それは、父親が木村と母親（郁子）をやたら接近させようとしてゐるからである。本来であれば、「自分と木村」との接近を望むべきものを、父親は己が「性欲」のために、娘ではなく、むしろ「二人」を接近させようとしてゐるからである。

次に、「母親と娘」との関係であるが、当の母親は、「……彼女の心の奥底には、自分の方が母より二十年も若いにかかわらず、容貌姿態の点において自分が母に劣つてゐるというコンプレックスがあるのではないか」とある。そして、その「コンプレックス」があるがゆえに、素直に木村さんが好きとも言えず、「……彼女は最初から木村さんは嫌いだ」と云い、ことさらに彼を嫌つてゐるらしく装つてはゐるが、しかし、本心は反対なのではないか。そして、内々私に敵意を抱きつつあるのではないかと記してゐるのである。

さて、この「母親と娘」との関係であるが、まず、娘（敏子）の「母親への嫉妬心」としては、一つは、母親より二十歳も自分は若いのに、容貌姿態の点において自分は母親に劣つてゐるという思い。一つは、心密かに愛してゐる木村の愛が、自分よりも母親の方に

注がれているということ。そして、もう一つは、父親は母親と木村さんをやたら接近させようとしている、しかも、母親も木村さんもそれを拒もうとするどころか、むしろそれを楽しんでいゝ。そのことでは父親も母親も（木村さんも）憎んでいるのである。

一方、母親の娘（敏子）へ「の嫉妬心」としては、一つは、木村は自分だけではなく、娘（敏子）をも愛しているのではないかという思い。一つは、娘（敏子）は、自分より二十歳も若い肉体を持っているということ。そして、もう一つは、敏子は、木村が嫌いだと言っているが、しかし、二人は密かに関係ができていゝのではないかという疑いである。

そして、娘（敏子）としては、今の「段階」では、「……木村の愛がより多く母親に注がれていることを知っているのゝ、まず母親を取り持つておいて徐ろに策を廻らすつもりではないか」というのが、まさに「母親」の読みになるのである。そして、後日（別居後）、娘（敏子）が「二人」（母親と木村）を取り持つようになるが、その場合、彼女と木村との間に「予めど、れだけの連絡」があつたのかは、いまだに私にもよく分らないとしてゝいるのである。……

さて、「……私はできるだけ家を空けないことにしてゝいるけれども、（それは日記を読まれないために）、しかし、いつどんな事情で外出の必要に迫られることがあるかも知れず、そこで、私は、夫が内証で私の日記帳に眼を通したかどうかを、知るだけは知りたい」とある。そこで、次のような「方法」を考え出すことになるが、それは、「……セロフアテープを適當の長さに切り、帳面の表紙の或る一箇所を選んで、表と裏とをそのテープで封じてみた。こうすると、中を読むためにはテープを一度剥がさなければならぬ。一度剥がして、また新しいテープを同じ長さに切り、同じ位置に正確に貼っておく」ということは、理論上は可能でも実際にはとても面倒で煩瑣でできるものではない」とある。これは、一見、秘密主義の妻（郁子）らしく、いかにも隠そうと見せかけているとともに、これは、夫への一つの「挑戦」でもあり、「読めるものなら読んでごらんさいよ」ということであり、一方、テープで封印された日記帳を見た夫の、「よし、それなら、分らないように読んでみせる！」という気持ちをおこし、立たせて読ませるといゝ一つの「仕掛け」にもなつてゝいるのである。そして、妻（郁子）にしてみれば、自分が書いた「日記」の内容は、ぜひとも夫に読んでもらいたいと思つてゝいるのである。

*

*

（第二部へと続く）

「参考文献」

※底本「鍵」谷崎潤一郎著（「青空文庫」）